ゼロの使い魔　-ゲルマニアの終わらぬ円舞曲-

アグカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔　―ゲルマニアの終わらぬ円舞曲―

【Ｎコード】
Ｎ３２３９Ｔ

【作者名】
アグカ

【あらすじ】
ゲルマニアを舞台としたゼロの使い魔の二次創作です。以前『サロス』という名前で投稿しておりましたが、こちらのＩＤ『アグカ』へ統合する事になりました。『キャラ崩壊／オリキャラ／オリ主最強／独自解釈／原作崩壊／クロス』などの要素を多分に含みます。ヒロインは三名の予定。『原作小説やアニメなどから、技名／魔法名／兵器名や台詞の引用（転載？）などがあります』このような要素がお嫌いな方はご注意下さい。

物語を紡ぐ者（前書き）

とりあえずプロローグです。設定は次の話で書き出します。

物語を紡ぐ者

人間万時塞翁が馬とも言うが正にそうだと思う。
世の中予測出来ない事というのは、往々にして起きるものだなぁとつくづく思う。

なぜこのような事を考えているかと言えば、今のこの状況が原因である。
今の状況を説明すれば、俺は仕事から帰って部屋でゆっくりしていた。
テレビを見たり洗濯物を片付けたりと、まぁ、普段どおりに過ごしていた。

そうして、そろそろ寝ようかと思ったところ目の前に本が現れた。
表紙などに題名も無く鍵が掛けられている。
一応鍵は鎖で繋がって付属しているようだ。
後、なぜか分からんけど、羽ペンが付属してる。
一体全体なんなんだ、これは……

「何がどうしてこうなった……」
「こりゃ、早く開けんか！」
「……本が喋った？」
「むぅ～早くあけるのじゃ！」
「ああ、はいはい」

そうして言われるままに鍵を開け、本を開いたところ、なぜか幼女が出現。
……本当に何がどうなってるんだ？
俺は夢でも見てるんだろうか……

「夢ではないぞ」
「……？！」
「わしはのう、この本の説明の為の云わば精霊みたいなものじゃ」
「へ？」
「まぁわしの事はいい、説明するからよく聞け」

幼女が話した内容を纏めると、このような感じだ。

・この本は世界を創る為の神器である
・この本に題名と各種の設定を書く事で世界は生まれる
・書いた本人は物語の主人公となる
・既存の物語を舞台とする事も可能
・既存の物語を舞台としても別世界となる
・複数の物語の設定を使用する事が可能
・物語の中に生きる人の意思は操作出来ない
・どう生きるかは本人の自由
・本人の設定は自由に設定可能

こんな感じだ。
俄かには信じられないけど、目の前で起きた不思議現象を考えるとあながち嘘とも言えない。
それにこれ、考えようによってはある意味チャンスかもな。
今のどん底暮らしから脱却する為の……

「なぁ？」
「なんじゃ」
「別の世界の設定を使用出来るってあるけど」
「うむ、そうじゃ」
「これってさ、例えば別の世界の技術なんかを持っていく事も可能

って事？」
「可能じゃ」
「じゃあさ、例えば中世クラスの文明の世界に最先端科学技術を持っていく事も？」
「可能じゃのう」
「そうか……」

それだったらやりようによっては物凄い有利になるな。
今のどん底生活よりもずっといいだろう。

「わかった、やろう」
「そうか、では題名と設定を考えて書き記してくれ」

となれば、下手な世界を舞台にするのは不味いな。
出来れば現代社会よりも文明的発達が遅れていて、ある種強大な力と権力を保持出来るような世界がいい。
となれば……『ゼロの使い魔』かな。

あれは確か、中世クラスの文明だし魔法を除けば大した軍事力では無いはずだ。
ならば、あの世界を舞台としてそこに……やっぱり機動兵器は欲しいからガンダムか？
いや、ガンダムじゃ心もとないしここはいっそスパロボにするか。

俺自身の能力も嫌って程チートにしてしまおう。
そうすれば、生きるにもある程度楽ができるだろう。
まぁ、油断は出来ないだろうし、どこをどう転ぶかはわからないけど。

「よし決まった、題名と設定書くから羽ペン貸してくれ」

「ほれ」

え～と、こんな感じかな。
完璧に『僕の考えた最強キャラ』だな。
とはいえ、確実性を持たせるならこれくらいは必要だな。

「よし、終わったぞ」
「うむ、では行って来るがいい」
「ああ」

こうして本の中に吸い込まれたおれは、これから先ハルケギニアで生きる事になる訳だ。
果たしてどうなる事やらな。
まぁ、とりあえず、今までの生活よりもマシになる事を祈るとしよう。

※主人公設定（前書き）

今回は主人公に関する設定です。

※主人公設定

《《《《名前》》》》

・日本名：金子健太（かねこけんた）
・ハルケギニア名：クラウス・フォン・アキテーヌ
※命名の法則：キュルケに因む

《《《《年齢》》》》

・現実世界：二十九歳
・ハルケギニア：十六歳

《《《《容姿》》》》

・髪色：淡い緑
・目の色：虹彩異色（緑と黄色）
・顔：十人中、八人が振り向くようなイケメン
・背丈：１７９．２ｃｍ

《《《《性格》》》》

・人並みに明るい
・江戸っ子気質
・ややお人好しで冷酷にはなり切れない
・身内には寛容
・特に女性と子供には甘い
・平民や亜人への蔑視感情はなし

《《《《一人称》》》》

・通常：俺
・公式の場：私

《《《《本人能力》》》》

・無機物創造（クリエイト）
→生産工場や兵器などを作成可能
→意思を持つ存在は作成不可（生命体、植物など）
→作成する物の外観と機能をイメージする事で作成可能

・空間操作能力（スペースオペレーション）
→圧縮／拡大などが可能

・魔法はハルケギニアに準じる
→全属性スクウェアと虚無使用可能
→あまり使わない
→世界扉でも元の現実世界には戻れない
→戻れるのは才人のいた地球

・知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）
→あらゆる知識が収納されている
→機動兵器の操縦法なども入っている
→王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）のように喚び出す（よびだす）
→喚び出す（よびだす）際に欲しい知識をイメージする事で該当知識の本を直ぐに検索可能

・機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）
→各種機動兵器や様々な機械の設計図

↓現実世界、創作世界を問わずほぼ全ての設計図を収納
↓取り出すときは王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）のように取り出す

・上記を理解する頭脳

・身体能力はガンダールヴ程度
↓機械による身体向上によりガンダールヴを越える

《《《《領地》》》》

・ゲルマニア北部の海岸部分
・中央からは外れている辺境

《《《《爵位》》》》

・伯爵
↓購入した爵位なので序列はあまり高くない

《《《《原作知識》》》》

・ゼロの使い魔はアニメのみ鑑賞
・小説は読んでいない
・Ｗｉｋｉは読んでいる為、アニメで語られていない設定も把握
・好きなキャラ：『テファ』『キュルケ』『マチルダ』
・微妙なキャラ：『タバサ』
・嫌いなキャラ：『ルイズ』『才人』
・どうでもいいキャラ：『ギーシュ』『シエスタ』

《《《《備考》》》》

・現実ではどん底生活を送っていた
・ハルケギニアに渡り悠々自適に暮らす予定
・貴族のようなバカな贅沢はしない
・基本的に寛容であり大抵の事は許す
・自分に危害（肉体的、精神的、物質的問わず）を加える者は即制裁
・ゲルマニア皇帝への忠誠心は一切無し
・ブリミル教は嫌悪

爵位と領地ゲットだぜ！（前書き）

今回は爵位と領地の購入です。未だ領地にはたどり着いていません。
次の話で領地に着きます。

爵位と領地ゲットだぜ！

……

……

……

「う、うぅ～ん……」

ここは……そうか、俺、あの本の中に入ったんだっけ。

という事は、ここが設定した舞台であるハルケギニアのゲルマニア国か。

周りを見渡しても森だし、状況的には間違い無さそうだな。

一応ほっぺた抓ってみよう。

ぎゅうぅぅぅ……

「ういでででで！」

ふう、どうやら夢じゃないようだな。

というか、あまり力入れてないのに滅茶苦茶痛かったぞ。

これも身体能力をガンダールヴ並みにした事によるんだろうか？

と、こんな事している前に先に設定した能力の確認をしておこう。

能力使えなきゃ、この世界じゃ生きてはいけないからな。

「先ずは……『創造（クリエイト）』からだ。よし、イメージイメージっと！」

イメージする対象は……金貨だな。

先立つ物が無きゃどうしようもないし。

ポクポクポク……チーン！

な、なんだかレンジでチンのような感じの音がしたけど、大丈夫か……て、うほ、こりゃすげぇ！

マジで金貨が出来てる！

しかし、量が多すぎないか？

一応数えてみるか。

計測中……

やばい、数え切れん……幾らなんでも作りすぎた！

というかこれ、本当にハルケギニアで使われている金貨なのか？

現物見た事ないから、どういう見た目なのかわからないんだよなぁ。

「ま、いっか、一度街にでも行ってみて使えるか確認してみよっと」

でも、ここの場所がわからんのだよな。

どうすんべかねぇ。

……

……

そうだ、『飛行（フライ）』の魔法で上空から探せばいいか。

よし、そうとなりゃ膳は急げだ。

と、その前に、ハルケギニアの魔法って杖が無いと使えないんだったよな。

確か杖って形状とかは何でもいいんだっけかね。

ギーシュはバラの造花だったし。

だとすれば、杖だけじゃなくて攻撃能力も持った武器の方がいいな。
えと、何がいいかな。
……
……
うん、もうあれだ、親分の大好きな『参式斬艦刀』でいいや。
一応変形機能もイメージしてっと！
ポクポクポク……チーン！
うっし、出来た！
つか、あの出来上がりの際の効果音、なんとかならんのか？
どうも気が抜けるんだよな。
でも、杖との契約って日数掛かるんだよな確か。
う～ん、具体的な方法も知らないしなぁ……て、そうだ！
知識の本棚使えばいいんじゃん！
あれなら多分載ってるはずだ！
後で金貨の事も調べておかないとな！
「うっし、んでは知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）」
ブウゥン……
「お、出てきたな、え～とハルケギニアでの魔法関係はっと……お、あったあった」
いやはやほんと、この能力も便利だわ。
後々これ使ってハルケギニアの常識とかも学ぶべきだな。

まぁ、ブリミル教とか貴族とかはどうでもいいけど。

さてと、契約方法は……身につけた状態で念じるのか。
なんだか随分とアバウトだな……
ま、いいか、とりあえずやってみましょうかね。

「え～と、参式斬艦刀を構えてっと……イメージイメージっと」

うむむ……こんなんで本当に契約なんてできんのか？
なんだか、どうにもあれだ、激しく不安だな。

……

……

うむぅ～なんとなくイメージを続けたけど、契約が完了したのかようわからんぞ。
どうしたら完了になるんだ、これ。
なんかこう、ピキッと来るんかね。

「う～ん、どうしたもんかなぁ、とりあえず試しに魔法使ってみるか凝縮（コンデンセイション）！」

バシャァ……

お、およ、出来ちったぞ！
なんだ、もう完了してたんかい！
うむぅ、やっぱりこの世界はどうにもアバウトだな……もう少し繊細になって欲しいものだわ。

「まぁいっか、とりあえず魔法使えるみたいだし、街を探そう。飛（フライ）

行！」

フワッ……

うほ、マジで浮いた！

すげーなぁ、これが魔法の力かよ。

さっきの凝縮（コンデンセイション）もそうだけど、物理法則無視しまくりだな。

学者が聞いたら卒倒するだろうなぁ。

「えと、街はっと……お、明かりが見えるな、ここからそう遠くないな。うっし、んじゃ金貨を収納してさくっと向かいますか。」

その前に金貨の事調べてと……うん、どうやら間違い無い様だ。

でもなんでイメージ出来たんだ？

あれかな、一応俺もこの世界の住人になったから、必要最低限の知識とかは入ってるのかな？

まぁ、考えてもわからないし、とりあえずはいっか。

あ、そうだ、後どこで爵位を買うのかも調べておこう。

じゃないと色々面倒だからな。

確認中……

ふむ、首都ヴィンドボナの行政府か……ま、妥当なところだわな。

後は金貨を入れる袋作ってと……よし、これで準備万端。

んじゃ、早速向かいますかね。

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼首都ヴィンドボナ▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ふ～ん、結構賑わってるんだな。
とはいえなぁ、道端に普通に汚物落ちてるってどうなのよ……
明らかに人間の住む場所じゃねぇでしょうよ。
これじゃ疫病発生するのも無理ないわな。
領地を手に入れたら、清掃用の人員雇って綺麗にしとかないとな。
疫病もやだし、何より俺が耐えられん！

……

……

さてと、そうこうしている内にヴィンドボナの行政府に着いたか。
ここで爵位と領地を買い取る訳だな。
まぁ、何処にするかはもう決めてあるんだけど、その場所開いてればいいんだけどね。

「ちわ～す」
「いかがなさいましたか」
「えと、ここで爵位買えるって聞いたんすけど。あ、金はこれです。」

ドサッ！

「さ、左様でございますか、確かに爵位はこちらで購入する事が出来ます」
「領地も買えるんすよね？」
「え、ええ」
「なら、今時点で買える領地と爵位の一覧見せて貰えます？」

「はい、こちらになります」

え～と、ふむふむ、侯爵まで売ってんのかよ。
そりゃ爵位の売却とかは実際あったようだけど、ここまでやるんかね。
まぁ、俺としては侯爵なんてめんどくさいから伯爵で十分だけどさ。

それと領地は……お、おあつらえ向きのとこあんじゃんか。
北の辺境だし、海に面してるしいう事なしだな。
よし、爵位は伯爵で領地はここにしよっと。

「えと、爵位は『伯爵』を、領地は北のここをお願いします」
「は、伯爵でございますか？　相当に値が張りますが……」
「ええ、構わないっすよ、調べてみてくださいや」
「で、では、失礼して……」

そうして受付の人は奥に引っ込んでいった。
なんだか、滅茶苦茶重そうにしてたけど、んなにあったのかね。
まぁ、数えてないからどんだけあったのかわからんけどさ。

……
……

待つこと十数分、受付の人が戻ってきた。
どうやら、金貨の数を数え終わったようだな。

「お、お待たせいたしました」
「どうも～」
「確認しました結果、金貨の方は五万エキューほどありました」

「そっすか」
「ええ、それとご所望された伯爵位と領地ですがあわせて四万エキューとなりますが……」
「いいっすよ、色つけて四万五千持ってってくださいや」
「さ、左様でございますか、ありがとうございます」
「いえいえ、世の中持ちつ持たれつって奴ですよ、ははは」
「そうですな、いや、お若いのにしっかりしていらっしゃる」

ま、大概こういった奴は金渡せば余計な詮索とかはして来ないからな。
どうせこんな場所で受付やってんだ、ただの木っ端役人だろうしな。
五千エキューも渡しておけば、まぁ、問題ねぇだろうさ。

「では、こちらにお名前のご記入をお願いいたします」
「はいはい」
「それと、政府へ収める税ですが、今月分は免除されます」
「なるほど、料金に含まれてる訳ですか」
「左様で」
「わかりました、翌月より収めます」
「お願いいたします」
「それでは、こちらのお名前で貴族名鑑に登録をさせていただきます」
「ほいさ。て、皇帝陛下への目通りとかは不要なんです？」
「ええ、貴族名鑑に載せるだけで結構です」
「なるほど」

下手な奴と目通りして命狙われちゃかなわんてとこかね。
確かゲルマニアの皇帝って、頗る疑心暗鬼というか猜疑心が強いというかなんというか。

ともかく人間不信気味だったよな。
なら、無理して会う必要性は無いわな。

「それと、こちらが領主の館の鍵になります」
「どうも～」
「では、また何かございましたら、よろしくお願いします」
「うい～す」

さてと、これで晴れて貴族の位はゲットした訳だ。
つか、思ったけどマジでざるだな……あんなんでいいんかいな。
まぁ、文明レベルは中世程度だし、こんなもんなのかね。
それともあれか、袖の下渡したからかね。
ま、どっちでもいっか、別に関係ねぇし。
さてと、さっさと領地へ向かいますかね。

爵位と領地ゲットだぜ！（後書き）

領地の購入シーンですけど、あんなものかなと。
ぶっちゃけ、住所を示すようなものとかもないですし、ざるでいいかな～と。
袖の下も渡している事ですし。

次回以降は、領地に入って経営始めます。まぁ、ここまではプロローグみたいなものです。あ、ちなみに、次回以降メイドさんでオリキャラが出ます。ヒロインて訳じゃないんですが、使用人とかは名前も含めて全部オリキャラです。さほど物語りには絡まないので問題はないと思いますけどね。

では、次回もよろしくお願いします。

領地は遠いなぁ……（前書き）

領地の経営ですが、その前に使用人ゲットです。
まぁ、身分的には奴隷ですけど、主人公はそのような事を考えてはいません。
それと、大分口調も変えましたが、ハルケギニアへ来たという事もあり色々元の世界とは変えてあります。

領地は遠いなぁ……

爵位と領地を購入した後、首都で竜籠をチャーターして領地に向かっている。
ちなみにハルケギニアでは、『クラウス・フォン・アキテーヌ』と名乗る事にした。
ちょいとばっかし厨二な感じがしないでもないが、まぁ、いいだろう。
それと、俺が選んだ領地だけど、一応は領民もいるみたいだ。
領主不在という事もあって、かなり数は少ないみたいだけど。
そりゃそうだよな、行政が機能してないんじゃどうしようもないだろうし。

まぁ、俺が領主となる以上は税金は極力安くしよう。
金貨なんぞ幾らでも作れるからな、態々困窮している人から搾り取るような外道名真似をする必要はない。
建前上で一応は税金取らなきゃならないけど、まぁ、それでも他よりは断然安くする。

しかし、領主としてやってくのはいいとして、原作への介入とかどうしようかな。
何せ俺はルイズや才人は嫌いだしなぁ。
つか、そもそもトリステイン自体嫌いだし。
あのビッチ姫もなぁ。
出来る限り接触はしたくないんだよなぁ。

とりあえず当面の目標としては、領地を安定させてテファを探しに行こう。
確かウェストウッド村だったな。

んで、マチルダも合わせて連れて来てしまおう。
そうすると才人が死ぬだろうけど別にどうでもいいし。
原作自体破綻するだろうけど、俺がいる時点で破綻もクソも無いからな。
攻め込まれたら、ＰＴ部隊やＭＳ部隊使ってフルボッコにすりゃいいし。
烈風だろうがなんだろうが、機動兵器軍団には勝てまい。
俺自身も虚無だって使えるからな。
とはいえ慢心は出来ないから、ちゃんと能力を鍛える事も忘れないようにしよう。
世の中何が起きるか分からないからな！

「貴族様、まもなく到着いたします」
「あいよ」

さてと、そろそろ俺の領地に到着か。
きっと物凄く、寂れてるんだろうな。
ま、いいさ。
これからバシっと素晴らしい領地にしてやるわい！

……
……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼領主の館▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

うへ～ここが件の領主の館か、ほとんど廃墟じゃねぇか！
こりゃ掃除やらなんやら大変そうだな。

「では、私はこれで失礼いたします」
「ああ、あんがとさん、ほい、これチップね」

「い、いや、しかし」
「いいんだよ、俺からのほんの礼だ」
「あ、ありがとうございます」
「ほんじゃ、また何かあればよろしくな」
「はい、どうぞご贔屓に、では」

そうして竜籠のあんちゃんは飛んでいった。
まぁ、運送業ってなどこの世界も辛いもんだからね。
俺も経験した事あるからよ～くわかるわ。

さてと、とりあえず鍵開けて入ってみますか。

ガチャ……ギィィィ……

「ゴホッ！　な、なんだこりゃ、埃の山だな……こりゃ俺一人じゃ無理だぞ掃除……」

予想以上に酷いな。
これ、明らかに四万エキューの価値ないだろ。
ボリやがったな、あんちくしょうめ。

……
……

屋敷内部を探索してみるが、ところどころ内部も崩れていた。
ガラスは割れてるし、なんやかんやで、えらいグチャグチャだ。
「うぅ～む、こりゃ早めに使用人雇うなりして大掃除を慣行せねば！」

とはいえなぁ、使用人雇うにも伝がないしどうしたもんか。
まぁ、とりあえず、寝床だけでも確保しておくか。
とその前に金貨を作っておこう。

……

……

大体これで、五万エキューか。
今度からは五万エキューを一塊として作るとしよう。
んで、一万エキューだけ持っておいて、後は保管しとこっと。

と、そういえば、飯食ってなかったな。
う～む、どうしようかな。

「しまったな、非常食でも買っておくんだった……」

うむむ、困ったぞ。
とりあえず、村でも探して飯食わして貰おうかね。

「そうと決まれば早速……え～と、貰った地図からすれば……あ、ここか」

うし、んじゃ、場所も判明したしさくっと行きますか。
人がいればいいんだけどねぇ。

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼村▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

地図にある村に着いたんだけど、ここゴーストビレッジか？
マジでこんなとこに人おるんかいな。
なんだかめちゃ不安なんだけど。
「お～い、誰かいませんか～」
……
……
声を掛けてもむなしく響くのみか……ヤバイな、本格的にゴーストビレッジか？
ガサッ……
「ん？　誰かいるのか？」
「あ、あの……」
ふむ……小学生位のお嬢ちゃんだな。
しっかし、身なりがボロボロじゃないか。
ところどころ傷もあるし、なんぞあったんか？
「今度新しくここらの領主になった者だ。えと、お嬢ちゃんはここの娘かい？」
「あ、はい……」
「お父さんかお母さんいるかい？」
「はい……」
「んじゃ、案内してくれっかね」
「はぃ……こっちです」
そうして着いて行く訳なんだが……なんというかフラフラしてん

な。
これじゃ、食い物なんて期待出来そうもないな。
こりゃ街まで戻って仕入れて来るしかないか。

「お父さん、お母さん、領主様が……」
「え！」
「どうも、今度ここらの領主になったクラウス・フォン・アキテーヌです」
「こ、これは領主様！」
「そんな平伏しなくていいっすよ。別に取って食おうって訳じゃねぇっすから。」
「は、はぃ……」

ありゃま、こりゃ完璧に怯えてるな……余程貴族に酷い目に合わされたのかね。
まぁ、とりあえずは現状を確認しようかね。

「悪いけど、ちと聞きたい事があんだがいいか？」
「は、はい、なんなりとっ！」
「この村って、何人くらいいるんだ？」
「私達を含め、二十人ほどおりますが……」
「ふむ、予想よりいるな。んで、この有様だけど、何かあったのか？」
「……」
「あ～言いたくないなら無理して言わないでも構わんよ」
「いえ、実は以前の領主様が……」
「なんぞ、アホやらかしたんかい？」
「……人狩りを」
「は？」
「若い男を全て連れて行きまして……」

「そんで寂れた訳か……んで、そのバカ領主は？」
「なんでも、中央に行ったと……」
「……呆れて物も言えんな」

うへ～マジでそんな事しとったんかい。
そりゃ中世レベルの文明だし、人権とかの概念無いだろうけど、実際に聞くとなるとマジムカツクわ。
やっぱハルケギニアの貴族はクソが多いな。

「そりゃ随分と苦労しただろうなぁ」
「はい……」
「ま、安心しな、俺が領主になった以上はんな真似は二度としねぇからさ」
「ほ、本当ですか……」
「税金も建前上取らない訳にはいかんけど、まぁ、ほとんど取るつもりねぇからさ」
「え……」

ま、驚くわなそりゃ。
つか、俺は税金取らなくても別にいいからな。

「あ、そうそう、お嬢ちゃん」
「あ、はぃ……」
「こっちおいで」
「はぃ……」

ありゃーよく見ると化膿しかかってるじゃねぇか。
それに、痣とかも出来てるし……可愛そうになぁ。
よっし、お兄さんの魔法で癒してあげよう！

「酷い傷だな、待ってな、今治してやっから。癒し（ヒーリング）！」

パァァァァ……

「うっし、これでいいな！」
「い、痛くない……」
「ははは、こうみえても俺はスクウェアだからな！」
「りょ、領主様！　我々には治療の代金は！」
「んなもんいるかっつの！　ガキが苦しんでるのに救わねぇ訳ねぇだろ！」
「し、しかし……」

「あんなぁ、困ったときはお互い様って言葉があんだよ、困ってる人いたら助けるのが人の道ってもんだろ」

「……」
「だからよ、気にすんなよ、お嬢ちゃんもな♪」
「はぃ……！」
「ははは、なんだ元気出たじゃねぇか♪」
「あ、ありがとうございます！」
「いいって事さ。と、そうだった、その様子だと碌に食べてねぇだろ？」
「え、ええ……畑もほとんどが荒れてしまっていて……」
「わかった、街まですっ飛ばして食料買ってくるわ」
「よ、よろしいのですか？」

「当たり前だろうに、お前さん達は俺の領地の領民だしな。ま、ひとっ走り行って来るから、待っててくれや。」

「はい！」

んじゃ、超特急で飛ばして近くの街で食料買ってくるか。
とりあえず、肉類と飲み物関係だな。
体力つけるなら、肉類がいいだろうしな。

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼隣の領地の街▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ふむ、まぁ、ヴィンドボナほどじゃないがそこそこ賑わってるな。
ここなら食料もある程度は手に入るな。
序だからあれか、麦の種とかも購入していくか。
後はどうすっかなぁ、何か買うものあっかな。
う～む……

「旦那、貴族の旦那」
「ん？　誰だお前」
「へぃ、あっしはここらで人売りの商売してるもんでさ」
「人売り？　奴隷か？」
「へぇ、そうでやす」

マジかよ……奴隷なんて本当にいるんか……
現代人の俺からすれば、鬼畜の所業だぞそれ。
……でも待てよ、丁度使用人欲しかったしいいかもしれんな。
別に性的な事を要求するつもりなんてサラサラないし、ちゃんと給金払えば問題あるめぇ。
ならば、人助けも兼ねて買ってみるか。

「どんなのがいるんだ」
「へぇ、こちらへ」

そうして案内されたのは……裏道の一角にある広場だった。
そこには三人の奴隷と思しき人間が並んでいる。
全員女性だ。
その上、ほとんど目が死んでる。
こりゃ相当酷い事されたみたいだなぁ。

「全員奴隷か？」
「へぃ、全て生娘でやす、ヒヒヒ」
「そうか、なら全員買う」
「ぜ、全員でやすか？」
「駄目か？」
「結構な値になりやすぜ？」
「幾らだ？」
「全部で千五百エキューでやす」
「ふむ、ほらよ」

ドサッ

「色つけて二千入ってる、問題ないだろ」

「へへ、旦那は気前がいいですな、どうぞ持って行ってくだせぇ、
何をしても構いませんので、ヒヒヒ」

「そうかい、んじゃ連れてくぞ、おい、お前ら全員着いて来い」
「「「はい……」」」

ま、これで使用人の問題は解決だな。

彼女達にもちゃんと給金を与えて、しっかり養ってやろう。
無論、性的な事なんか要求するつもりは一切ないがな。

……

……

「えとだな、とりあえず俺が君らを買った理由だが」
「はい、どうぞ、お使い下さい……」
「待て待て、俺は別に君らに性的な要求をする気は一切無い」
「……では、何故私達を？」

「俺はさ、つい先日領主になったばっかでね。屋敷にも使用人が居ないわけよ。んで、丁度君らを見かけたんで、買った訳だ。」

「……私達を使用人としてお使いになるのですか？」
「ああ、勿論給金も出すしな」
「え？」

「俺は奴隷なんて制度は嫌いでね、まぁ、渡りに船と思って買っただけさ。君らを道具扱いする気はサラサラないよ、んな外道な真似は出来んからね。」

「で、でも……」

こりゃ相当根が深そうだな。
余程酷い目に合わされたんだろう。
全く、貴族ってなどうしてこう下種なのが多いのかねぇ。

「まぁ、俺も元々平民だよ、金で爵位買っただけさ」
「……左様でございますか」

「まぁ、あれだ、俺の屋敷はかなり酷い状況でね、明日にでも大掃除しなきゃならんからな。覚悟しておいてくれよ、クソ忙しくなるからな♪」

「畏まりました」

「と、そうだった、食料とか買って帰らないと。悪いが手伝ってくれ。」

「はい、お供いたします」

なんか、受け答えが機械じみてるというかなんというか……

まぁ、この辺は追々治していくしかあるまいな。

無理に治そうとしても、逆に傷を広げる結果になりかねん。

じっくりと時間を掛けて治していけばいいだろうさ。

……

……

「うっし、こんだけありゃ足りるだろ」

「……何故これほどの食料を？」

「ああ、村の連中にも配るんでな」

「村人に……ですか？」

「ああ、腹すかしてるみたいだったからよ」

「……左様でございますか」

「んじゃ、竜籠乗って帰るぞ」

「はい……」

つか、流石に買いすぎたな。

竜籠が四騎、食料と飲み物で埋まってしまった。

あの街にある竜籠全部チャーターしてしまったからな。

おかげで金使ったなぁ。
まぁ、元手はタダだから別に構わないけどさ。
にしても、購入した彼女達だけど随分とまぁ辛い思いしたみたいだな。
現代人としては、どうにも腹に据えかねるな。
彼女達には、しっかりと人並みの生活をさせてあげよう。

「貴族様、もうまなく目的地です」
「あいよ、んじゃ、降りる準備しようか」
「はい……ご主人様」
「……なぁ、頼むからさ、その呼び方なんとかならないか？」
「しかし……」
「んな呼び方さたら背中痒くなるってば、名前で呼んでくれていいって」
「そ、そんな、畏れ多い！」
「気にする事はないって、本人がいいって言ってんだから」
「で、でも……」
「安心しな、それで君らに何かするような真似はしねぇよ」
「は、はい、ではクラウス様と……」
「それでいいさ」

ご主人様だなんて呼ばれてたら、痒くてしょうがねぇっつの。
まぁ、俺の友人なら飛び上がって喜ぶだろうけど、この状況じゃねぇ。
とてもじゃないけど、そんな気起きないってばよ。

……
……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼領地内部：村▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

んでもって、村へ到着っと。
これから村人に飯食わせてやらんとな。
まぁ、俺達の分もあるから全部は渡せないけど、半分は持ってって貰ってかまわんしな。

「お～い！」
「領主様、お帰りなさいませ」
「お嬢ちゃんただいま、お父さんは？」
「あっちに」
「ＯＫ～んじゃ食料運ぶか……浮遊（レビテーション）」

食料は大量だからな、人の手じゃ運べないから浮遊（レビテーション）で運ぶと。
んで、お嬢ちゃんのお父さんのいるとこに行ってみると、お、どうやら村人集合してるみたいだな。
ふむ、確かに二十人いるな。
これならいきわたるだろ。

「お待たせ、食料買って来たぜ」
「ああ、ありがとうございます！」
「まぁ、半分は俺達の分だが、それでも十分な量だろ。それとこれな。」
「こ、これは？」
「麦と野菜の種、畑に植えるといいさ」
「よ、よろしいのですか？」
「ああ、構わねぇよ」
「何から何まで……ありがとうございます」
「いいって事よ、気にすんなよ」

……

……

それから持ってきた食料を調理して、皆で宴会状態だった。
村人も久々にまともな飯が食えたせいか、随分とハイテンションだ。
ま、この方が俺としても嬉しいがね。
あのお嬢ちゃんも随分と明るくなったな。
まぁ、やっぱり美味い飯食えば明るくなるもんだな。

「ほら、お前らも遠慮せず食えって」
「は、はい、でも……」
「だ～もう、遠慮はいらねぇって言ってんだろうが、こりゃ命令だ、しっかり食え！」
「は、はい」
「あの、領主様、そちらの方は？」

「ん、ああ、なんか街で売ってた奴隷さんでね、使用人いねぇし丁度いいやと思って買ってきた。まぁ、見た目はこの通り美人だからな、手出すなよ、お前ら♪」

「と、とんでもない、領主様の奴隷に手を出すなど」
「ま、俺は奴隷なんて思ってねぇけどな」
「……クラウス様」
「あん？」
「本当に私達をお使いになりませんの？」

「あほ、んな真似誰がするかっつーの！　惚れてもいねぇ女なんざ抱けるか！　まぁ、お前らも随分辛い目にあったんだろうけどよ、俺のとこにいる限りはんな真似はさせねぇからさ、だからよ、安心しなって、な！」

「……わ、私達、本当に人に戻れるんですの」
「戻るも何も、お前ら人だろうが」
「……！　あ、ありがとう……ございます……ぐすっ」

あらら、泣き出しちまったよ。
そらまぁ、無理もねぇか。
奴隷なんぞ人とは思われてないだろうしな。

まぁ、これで少しは前向きになるだろうよ。
たく、本当にハルケギニアの社会ってのはよ。
今時奴隷だなんてはやらないぜ。

「んじゃ、そろそろ館に戻るか」
「「「はい、お供いたします」」」
「んじゃ、お嬢ちゃん、またな」
「はい、領主様」
「親父さんも、なんかあったら来てくれや」
「はい、ありがとうございます」
「んじゃな」

……
……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼領主の館▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

さてと、とりあえず戻ってきたが、見れば見るほどオンボロだな、この館は。
こりゃ立て直した方が早いんじゃねぇかと思えて来るぜ。

「まぁ、ここが館な訳だ」
「はい……」
「あ、そういやさ、お前らの名前聞いてなかったな」
「あ、はい、私は『ユウ』です」
「私は『レイ』です」
「わたしは「アイ」です」
「そうか、覚えたぜ。とりあえず寝れそうな場所を確保しようや。」
「はい、畏まりました」

そうして四人でなんとか寝れそうな場所を確保。
つか、ここ、マジでボロ屋敷だな。
いっそ立て直すべきかねぇ。
まぁ、明日になったら考えよう。
お休みよ～ｚｚｚ

……
……

……う、うぅ～む。
なんかこう、あんまり疲れが取れた感じがしないな。
やっぱまともな寝床で寝ないと駄目だな。
さてと、今日から忙しくなる訳だし気合入れてやりますか。
て、三人はまだ寝てるな。
まぁ、起こすのは可愛そうだけど、仕事だからね、しっかりやって貰わないと。

「お～い、起きろ～」
「……ふぁ……」
「あふ……」
「うぅ……」

「起きたか？」
「……ク、クラウス様、も、申し訳ございません！」
「す、直ぐに支度を！」
「ああ、いいっていいって、俺も今起きたとこだから。さ、顔洗って飯食ったら館の掃除だ！」
「は、はい！」

いやはや、起き抜けの三人は可愛かったね。
うむ、朝から眼福ものだったわ。
さてと、俺も顔洗って飯食って働くとしますかね。

……

とは言ったものの、どこから手をつけるべきか……
とりあえず、俺と三人の寝床と俺の仕事部屋、それと飯食う場所の確保かな。

「とりあえず、俺と君ら三人の寝る場所から確保しようか」
「あ、はい」
「悪いけどさ、君ら三人とりあえず同じ部屋でいいか？」
「い、いえ、私達（わたくし）はお部屋を頂けるだけでも」
「そっか、まぁ、一応広めの部屋にしとくわ」
「そ、そんな、お気遣いなさらなくても……」
「いいんだって、女性は何かと入用だろうからさ、あ、それとこれ給金の前払いな」
ジャラ……

「……こ、こんなに！」
「一月で二十エキューありゃ足りるか？」
「と、とんでもないです、多すぎます！」
「そうか？　ま、使わない分は貯蓄しときなって」
「は、はい、ですが本当によろしいのでしょうか……」
「俺が構わねぇって言ってんだ、いいから貰っとけ」
「は、はい、ありがとうございます」
「うっしゃ、んじゃ、掃除始めるぜ！」
「「「はい！」」」

いやさ、しっかしひでーなこりゃ。
掃除始めたはいいけど、こりゃ一日二日じゃおわんねぇぞ。
全く、よくもまぁこんな酷いところをあんな値で売ってたもんだわ。

「いや～予想以上に酷いな」
「そ、そうですわね」
「これは、少々時間が掛かりそうですね」
「そうですね、これは時間掛かるかも……」

う～む、どうしたもんかねぇ。
……つか、錬金で邪魔な物、全部分解しちまえばいいんじゃね？
そうすりゃ大分楽になるだろうな。
うっし、やってみっか。

「ちと魔法使うから下がっててくれ」
「あ、はい……」
「と、その前に、知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）！」

ブゥン……

「あ、あの、クラウス様これは？」
「ん？　ああ、俺の本棚、ちょいと特殊でな。え～と、魔法関連魔法関連と……あったあった。」
え～と何々……相変わらずハルケギニアの魔法ってアバウトだな。
もうちょいこう、発動原理とかないのかよ。
なんだ、杖掲げてイメージしろって……
想像力貧困だと、こりゃ大変そうだな。
まぁ、俺は妄想に関しては一流だからな！
……自分で言ってて恥ずかしくなるわ。
「うっし、んじゃいくぞ、『錬金』！」
パァァァァァ……
うほ、すげーな、本当に瓦礫とかが分解されていくぞ。
こりゃ便利だわ。
つっても、物作るなら創造（クリエイト）の能力あっからいらんのだけどね。
まぁ、あれだ、ゴミ処理用だな、こりゃ。
「うっし、邪魔な物の排除完了っと！」
「……す、凄いですわ」
「まぁこう見えても魔法はスクウェアだからな！」
「クラウス様って、何でも出来ますのね」
「凄いです～」
「ははは、褒めても何も出ねぇよ、さ、掃除の続きだ！」
「「「はい！」」」

こうして、館中の瓦礫やらゴミを分解しつつ掃除を続けたところなんとか三人の部屋と俺の部屋を確保。

他は、なんつーのか床もボロボロだったものだから、一度錬金か何かで補修しないと駄目なようだ。

やれやれ、領主としての仕事の前に土建屋の仕事せにゃならんとはな。

ああ、万時平和な生活はまだ先のようだ。

領地は遠いなぁ……（後書き）

う～む、メイド三人に個性を持たせるのが難しい。
なんというか、元々が奴隷の立場だったので、あまり口調を変にする訳にもいかず、なかなか個性の表現が難しいです。
何れはそれぞれ得意分野などを出し、もっと個性を前面に出します。
では、次回また～ノシ

地下秘密基地建設開始（前書き）

地下の秘密基地の建設開始です。モデルはスパロボＯＧの伊豆基地です。

地下秘密基地建設開始

▼▼▼▼▼▼▼▼▼館裏手▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

あれから一週間、ほぼ不眠不休状態で働き、漸く館が元の姿に戻った。

外から見ると、なかなかいい感じだ。

途中、アイ達三人は流石にダウンしてしまい、今は館の部屋で寝ている。

彼女達も色々頑張ってくれたからな、今はゆっくり休ませてやろう。

んで、館の方も落ち着いたのでこれからの事を考えておかねばなるまい。

今のところは、さしたる問題も無いが何れは他所の貴族が難癖付けて来る可能性もある。

特に皇帝は猜疑心が強いからな、いちゃもん付けて来るのは目に見えている。

そういった状況を考慮し、優先的にすべき事はこんな感じか。

・軍事力の作成
・地下秘密基地の作成
・補給路の確保
・領内街道の整備
・他領との境界線に検問設置

軍事力の保有は急務だが、先に基地の建設が必要だな。

創造(クリエイト)の能力で作業用ロボット作って秘密基地作らせて、基地が完成したら速攻で各種機動兵器を作成する事にしよう。

創るべき物は……うむ、やっぱあれだよな、参式斬艦刀を持ってる事だし、親分の機体を創らねばなるまい！
それと、秘密基地との行き来はテレポーターを設置しよう。
下手に入られて秘密がバレるとうざいからな。
まぁ、誰も真似は出来んけど。
うっし、それじゃ早速にでも始めよう、先ずは作業用ロボットの作成と掘削用機械の創造だな。
やっぱドリルは漢のロマンだぜぃ！
それと、作業用ロボットのイメージは、あれでいいか、シャドウミラーのWシリーズ。

「うっしゃ！　気合入れていくぜ！　創造（クリエイト）！！」

ポクポクポク……チーン！

うっし、出来たな。
見た目も間違いないようだ。
よし、続けてどんどんいくぜ！

作成中……
作成中……
作成中……

うん、やばい、調子こいて創りすぎた！
合計で三百体も創ってしまった！
いやはや、なんか創るの面白くなってしまってやりすぎたな。
まぁ、これから色々作るし多いに越した事は無いか。

「クリエイター、ご命令を」

「お前らにはこの領地の北にある海底に基地を建設して貰う。建設用機械の創造完了後、早速作業に取り掛かれ。」

「イエッサー」

その前に基地の広さを決めておかないとな。
ハガネとクロガネが収容出来る事を考えると、アニメでも出てきた『伊豆基地』と同じくらいの広さだな。
となると……5Km四方くらいでいいのかね。
具体的な広さって分からないんだよな。
まぁ、足りなくなればまた拡張すりゃいいか。

「んでは、掘削機械の創造を……とその前に、機械仕掛けの神(デウス・エクス・マキナ)！」

ブゥン……

えと、掘削機械関係はと……お、あったあった。
うほ～色々あるなぁ。
現代世界のトンネル掘削機とかもあるなぁ。
でもこれじゃ作業時間が掛かりすぎるからな、別なのにしよう。
ふむ、手ごろなのはこれかな。
見た事ないけど、どうやらスパロボの世界の機械のようだ。
まぁ、原作には出ないだろうけどな、こんな土建機械は。

「よし、創るか！　創造(クリエイト)！！」

ポクポクポク

……

……チーン！！！

やっぱり大型になると作成時間結構かかるな。
こりゃ、クロガネとか創るときは大変そうだな。

「一台だけじゃ足りないだろうから、どんどん作らないと！」

作成中……
作成中……
作成中……

うっし、合計百台作った！
丁度これ、三人乗りみたいだからな。
これだけあれば、余裕でいけるだろ。

それと、通信用の機械と搬入路用の資材も創っておくか。
先に全部引き渡しておいた方が、後々楽だろうしな。

「機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）！」

え～と通信機器はっと……あ、これだな。
うっし、創造（クリエイト）開始！

ポクポクポク……チーン！

出来たか。
数は五十個だけど、まぁ、十分足りるだろう。
それじゃ次は搬入路を作る為の資材だな。

「知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）！」

え～と、合金の素材はっと……ふむふむなるほどね。

チタンとアルミと希少金属か……なかなかいいの使ってるな。
まぁ、これならかなりの強度だから問題あるまいな。
おっし、創るとしますか！

「創造（クリエイト）！」

ポクポクポク……チーン！！！

や、やっぱ資材だけあってクソなげぇな。
まぁ、こんだけありゃ十分足りるだろう。
なんせ、山になってるくらいだからな。
それじゃ、Wシリーズに命令しますか。

「では、掘削機械、通信用機器、資材は用意出来た。基地の広さは5Km四方。海水が入り込まないように、陸地から掘り進め。なお、掘り進んだ穴は資材の搬入路も兼ねるので注意しろ。それとそこのお前、お前を指揮官機に命ずる、作業状況などは逐一報告せよ。」

「了解」
「作業の全工程は二週間で完了させろ、いいな！！」
「了解」

Wシリーズはロボットだからな、幾ら働いても文句も言わないし疲れもしない。
これなら、一週間以内に出来上がるだろう。
んだば、俺はその間に……何してようかな。
ぶっちゃけ、今のとこ基地が完成しない事にはやる事ないしなぁ。
う～む、どうするかな。

「領主様」
「ん？　ああ、親父さん、どうした？」
「実はご相談が……」
「何だ？」

親父さんの相談事とは、荒れ果てた畑と家屋の事だった。
あ～そういや、あの村は見た目ゴーストビレッジだったもんなぁ。
うっし、どうせ暇だし、いっちょ直してやりますか！

「わかった、んじゃ今から行って修繕するか」
「あ、ありがとうございます！」

……
……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼村▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

いやはや、昼間に来て見ると余計に酷いなここは。
あばら家どころじゃねぇぞ、よくあれで建ってるな。

「こらひでーなぁ」
「ええ……」
「うっし、任せな！　きっちり直してやっからさ！」
「お願いいたします！」

うっしゃ、気合入れてやりますか！

作業中……
作業中……
作業中……

うっしゃあ、完了だ！
いや～なかなか疲れる作業だったな。
途中から、村人も集まって一緒に作業してたから、ほとんど土建屋の集まりみたいになってしまった。

「ふう、これでなんとかなりそうだな」
「ありがとうございます、本当になんと感謝すればいいのか……」
「気にするな、持ちつ持たれつってやつよ、ははは！」

そういや、ここの領地って結構広いみたいだが、他に村はないのかね。
一応聞いてみるか。

「そういやよ」
「はい、なんでしょうか」
「この領地って他に村はねぇのか？」
「……以前はあったのですが」
「前のクソ領主か」
「ええ……」
「たく、しょうがねぇな、んならよ今後はこの村基点にして発展させようかね」
「こ、この村をですか？」
「ああ、街道整備してどこぞから人引っ張ってくりゃなんとかなんだろ」
「しかし、他の領主から反発が……」
「んなもん、喧嘩売ってくるなら買うまでよ、火事と喧嘩は江戸の華ってな！」
「は、はぁ……」

どのみち、発展させていけば目ざとい商人共が勝手に集まってくるだろう。
いっそ、全部の家を石造りに変えて、街並みももっと高級感ある感じにしちまうか！
喧嘩売られたところで、軍事力さえ整えばどうとでもなるんだ。
ならばいっそ、他に真似出来ない街にしちまえばいいんだ。
遠慮なんざする事はねぇな！

「まぁ、あれだ、村の拡張は何れ始めるからよ。それまでにしっかり計画練っておくさ。」
「左様でございますか、我々でご協力する事があれば」
「おう、そんときゃよろしく頼むぜ！」
「はい」

うっし、これでまたやる事増えたな。
まぁ、先ずは軍事力の整備が優先だな。
それが終わり次第、街道の整備と村の拡充を始めるとしようかね。

……
……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼館▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

戻ってみたら、アイ達三人も目が覚めたようで館の掃除やらの仕事をしていた。
自分達だけ休んでしまい申し訳ないと随分平伏してたが、ちゃんと仕事してたんだから別に気にする事じゃねぇな。
なので、別段怒ってないし咎める事でも無いと言ったんだけど、それでも謝り続けるからつい説教してしまったわ。
まぁ、ハルケギニアの平民は貴族には平伏するように教育されて

っから仕方ねぇのかもしれないけど。
とはいえなぁ、これから一緒に暮らす訳だし、一々あんな風に平伏されてちゃこっちの息がつまるってもんだ。
何れなんとか改善してかにゃいかんわな。

「しかしまぁ、こうして見ると広いな、この館」
「そうですわね」
「はい」
「ええ、クラウス様」
「つかよ、三人のその服装なんとかならんのか、目のやり場に困るぞ正直よ……」
「と、申されましても……」
「私達はこれしか」
「申し訳ありません」

彼女らがどんな服装してるかっていや、メイド服なんだけどな。
でもよ、胸元開きまくってんだよ！
正直な話、独り身の俺には辛いんだってば！
だってよ、彼女ら確実に９０は越えてるぞ！
巨乳大好き人間、オパーイ星人な俺としては非常に苦しいのだ！
しかも、スカートも丈が短いしよう……
生殺し状態だからなぁ……なんとかしねぇと。

「三人を街に連れて行くにもなぁ、馬車とかねぇし。どうすっかねぇ。」
創造（クリエイト）で創るべきか？
知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）になら、多分服飾関係もあるはずだしな。
恐らく下着関係もあんだろ。
あれって、取り出せば本だからな、俺が許可した人間なら閲覧出

来るし。
うっし、んじゃ、やってみるか。
先ずはサイズ計測用のメジャーを創る事からだな。

「よし、思いついた」
「？」
「創造（クリエイト）！」

ポクポクポク……チーン！

「うっし、それじゃ全員の服のサイズ測るぞ」
「あ、はい」
「つっても、お前らそれぞれで測ってくれや」
「え、でも……」
「何、こいつをな、こうやって……ほれ伸ばせば計測できっからさ」
「わかりました」

やっぱりよ、胸測るとか恥ずかしいもんな！
触れでもしたら、洒落にならんからな。
女同士で測る方が、何かといいだろ。

計測中……

んで、計測の結果だが、こんな結果とあいなった。

・ユウ：Ｂ９５／Ｗ６１／Ｈ９２
・レイ：Ｂ９３／Ｗ５９／Ｈ８９
・アイ：Ｂ９４／Ｗ６２／Ｈ９１

なんでみんなそんなにスタイルいいんだよ！

全く、本当に目の毒……いや、眼福なのかね。
まぁ、いいや、んじゃ知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）を出してっと。
え～と、服飾関係か……あ、これだこれ。

「三人とも、この中で好きな服と下着選んでくれや。俺が作るから。」
「よろしいのですか？」
「ああ、今のままで居られる方が、男のおれとしちゃ目に毒だわ……」
「……左様でございますか」
「では、選ばせていただきます」
「私もです」

こうして、三人は服と下着を選び始めたのだが……やっぱこういう事になると古今東西女性の談義は長いな。
まぁ、時間はあるし、適度にやってくれや。

選び中……

な、長げぇ……何時まで選んでるんだよ。
女の服選びはこんなにクソ長げぇのかよ……

「おいおい、何時まで選んでるんだよ」
「も、申し訳ございません！」
「楽しいのはわかるがよ、少しは自重してくれや♪」
「す、すみません！」
「ごめんなさい！」
「ま、いいか、んでどうなんだよ、選べたのか？」
「あ、はい、大体は……」
「うっし、それじゃ一先ず創るか、どれだ？」

「私(わたくし)はこれとこれを」
「私はこれとこれを」
「わたしはこれとこれを」

ふむ……つかよ、どうして下着がんなにエロいんだよ！
あれか、お前ら三人して俺を生殺ししたいのか？
マジで襲うぞ、こんちくしょう！

「なんつーか、派手な下着だな、おい」
「そ、そうでしょうか」
「ま、お前らがいいならいいさ、んじゃ創るぞ、創造(クリエイト)！」

ポクポクポク……チーン！

「ほれ」
「あ、ありがとうございます」
「次はレイな」
「はい」
「創造(クリエイト)！」

ポクポクポク……チーン！

「ほらよ」
「どうも」
「最後はアイだな」
「はい、お願いします」
「創造(クリエイト)！」

ポクポクポク……チーン！

「ほい、出来たぞ」
「ありがとうございます～」

とりあえず、これで服装はなんとかなるな。
俺の分は後で創ればいいだろうな。
後はWシリーズからの通信を待つだけ『ピピッ！』
と、もう通信来たのか。

ブゥン……

「なんだ、何かあったか？」
「地下にエネルギー結晶体が多数存在します」
「エネルギー結晶体？」

……あ、あれか、大隆起の原因になる風石って奴か！
丁度いい、全部掘り出してしまえ！

「全て掘り出せ、あまり強い衝撃は与えるな」
「了解」

あれだ、他の国のも含めて全部掘り出して処分してしまうか。
そうすりゃロマリアのクソ教皇の大義名分も無くなるしな。
別に他の国がどうなろうが知った事では無いが、戦争なんざ下らないだけだからな！

「あ、あの、クラウス様、今のは……」
「ああ、俺が作った……ロボットって言ってもわからんか、まぁ、ゴーレムみたいなもんだ」
「は、はぁ……」
「今後は結構あいつらから通信来るからさ、あんまビビるなよ」

「「「畏まりました」」」

さてと、後やるべき事は……基地の建設用資材を今の内に創っておくか。

整備用の工作機械とか色々あるからな、創るのに多少は時間掛かるだろうし。

んじゃ、ちゃちゃっと始めますかね。

「俺は少々やる事があっからさ、とりあえず館の方は任せるわ」

「はい、あのどちらに？」

「ああ、館のすぐ裏手にいる」

「畏まりました、お客様がお見えになりましたらお呼びに行きますわ」

「頼む」

通信機使わせようにもなぁ、いきなり機械は理解出来ないだろうからな。

何れは通信機位は使えるようにさせておくか。

小型ので持ち運び出来るのを持たせておけば、何かあったら直ぐわかるからな。

んじゃま、資材の作成に入りますかね。

「え～と、基地の設計図を見て必要な材料を調べるか、機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）！」

何々、うへ～相当多いな……まぁ、伊豆基地ほどの広さならこれくらいは妥当か。

いやはや、予想以上に多いな。

まぁ、一度に大量に作れるのが創造（クリエイト）のいいとこなんだが。

しゃーねぇわな、いっちょやったりますかっ！

「うっし、じゃあ先ずは基本となる構造材からだな、創造（クリエイト）！！」

作成中……
作成中……
作成中……
作成中……

うひ～こりゃ大分掛かりそうだ。
まぁ、今のところはそう焦る事も無いし、ミスのないように進めるとしよう。

それと、基地の建設が完了したら即効でWシリーズ量産して更には機動兵器の生産に着手すっか。
Wシリーズは三百じゃ心もとないからな、かなりの数を生産しとかないと。
機動兵器は、一品物と量産機とで分けておくか。
量産機は、領地防衛用と攻撃用で分けるとしよう。
しかし、そうなって来ると部隊表とか作った方がよさそうだな。
俺が分からなくなりそうだし。
うっし、後で創るとしようかね。
んじゃ、続き続きっと！

作成中……
作成中……
作成中……
作成中……

「クラウス様」
「あん？　どした？」

「お食事をお持ちいたしました」
「お、すまねぇな、ユウ」
「いえ」
「これ、お前が作ったのか？」
「あ、はい、料理は得意ですので……」
「そっか、んじゃま、いっただきま～す！」

む、うめぇ！
やるじゃんか、ユウの奴よ！
こりゃ、これからの飯が楽しみだな！

「うめぇ！」
「あ、ありがとうございます！」
「いや～ユウにこんな特技があるとはな、これならいい嫁さんになれるぜ！」
「そ、そんな、私（わたくし）は……」
「ははは、ユウを嫁さんに貰える野郎は果報者だな」
「……」

いや～マジ美味いわ。
これなら、毎日食っても飽きないな。
しかし、女の手料理か……なんだか凄く嬉しいぜ。
昔は彼女いなかったからなぁ……ああ、なんか言ってて寂しくなってくるぜ。

「うっし、ごちそうさん、美味かったぜ」
「はい」
「また創ってくれや」
「はい、喜んで！」

ユウの奴も結構明るくなったな。
まぁ、レイとアイはまだ少しぎこちないが。
その内、本性現すだろうな。
どんなのか楽しみではあるよな。
賑やかなのはいい事だぜ。
さ、飯食って力ついたし、もういっちょ頑張るか！

地下秘密基地建設開始（後書き）

という訳で、スパロボＯＧよりＷシリーズに登場していただきました。
なお、ラミアとかは出しません。色々と面倒なので……好きなんですけどね。

保有戦力については、既に設定は出来上がっているのですが、どうなんでしょう、設定として出した方がいいんでしょうか？

三人娘についても、一応設定作りました。まぁ、簡単なものではありますが。
後、領地の場所などの地図も作りました。

もし意見などがあれば、掲載しようと思います。

では、また次回よろしくですノシ

秘密基地建設続行中……ポロリもあるよ！（前書き）

今回は基地の建造の続きと、館の改造などです。
少々村人が増えますが、あくまでモブキャラです。

秘密基地建設続行中……ポロリもあるよ！

基地の建設開始から、既に二週間が経過した。
資材なんかの作成も終わり、基地の必要面積は掘削も完了。
念の為、確認に行ったところ滅茶苦茶広かった。
流石に５Ｋｍ四方というのは、広すぎたかもしれん。

まぁ、とにかく、掘削も終わり搬入路も既に完成しているので後は実際に基地を建設するだけだ。
基地の内容としては、今のところはこんな感じだな。

・エネルギープラント
・水の浄化システム
・空気清浄機器
・バイオハザードシステム
・対地、対空用迎撃システム
・各種生産工場
・整備用ドッグ
・発進用ドッグ
・訓練用施設
・医療施設
・居住施設
・Ｗシリーズ用整備施設

こうして考えてみると、結構な施設量ではあるが、広さ的な問題は無いから構わないだろう。
なお、エネルギープラントは海中のプランクトンや有機物を使用する、非常にエコなシステムだ。
爆発の危険性もほとんどなく、メンテを怠らなければ故障の可能

性も限りなく0に近いという優れもの。
メンテの方法などは、専用のWシリーズを作成する事にしようと思っている。
Wシリーズも今の数では足りないので、後々基地が完成次第目的に合わせた仕様で増産する予定だ。
いや～なんてのか、やっぱ秘密基地は男の夢だよな！
なんだか、ワクワクするぜ！

「クリエイター次の命令を」
「よし、では基地の建設を開始しろ。作業期間は一ヶ月だ。人員が不足する場合は報告しろ。」
「了解」
「では、作業に掛かれ」

いや～いいねいいね、これで俺も晴れて秘密基地のオーナーだ！
ガキの頃にもよく友達と作ったもんだよなぁ、秘密基地。
今回のは規模がかなり違うけど。
なんせ、予定している保有戦力が出来上がれば、ハルケギニアを統一するのも多分数日で出来るからなぁ。
とはいえ、別にそんな事するつもりは無いけど。
統一なんてしたって面倒なだけだしな。

つか、今の内にWシリーズを量産しておくべきかな。
でも、まだいいか、リーダー機から要請が来たら作るとしよう。
今作っても、ごちゃごちゃするだけだろうし、おいて置く場所もないしな。

それと、今一番懸念してるのが、『ティファニア』と『マチルダ』の事なんだよなぁ。
二人共可能な限り早めにこっちに連れて来るべきだよな。

飛行出来るタイプの機動兵器に不可視になる装置取り付けてアルビオンに乗り込んで、二人共連れて来るか。
しかし、ティファニアはまだいいとして、マチルダがどこにいるかだよなぁ。
あれって、何時頃から魔法学院で働いてたのかねぇ。
今って確か、原作の一年前だからなぁ。
うむむ、どうすっかなぁ……そうだ！
小型の偵察用衛星打ち上げよう！
どうせ、誰もわかりゃしないしな。
うっし、そうと決まれば早速……

「え～と、先ずは知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）！」

ブゥン……

へ～偵察衛星ってこんな原理だったのか。
カメラの精度もいいし、これなら使えそうだな。

「うっし、次は機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）！」

え～と小型の偵察衛星はっと……お、これだこれ。
この大きさなら打ち上げてもバレないだろうしな。
まぁ、バレたところでどうもならんけどな。
一応ハルケギニア全体の監視用と領地とその周辺監視用の二機作った方がいいな。
うっし、それじゃ早速創りますか！

「創造（クリエイト）！」

ポクポクポク……チーン！！！

「もういっちょ！　創造（クリエイト）！！」

ポクポクポク……チーン！！！

ふう、今回は割りと早く創れたな。
しかし、小型といってもやっぱ結構デカイな。
まぁ、これでもかなり小型化してるんだろうけどな。
とりあえず後はこれを打ち上げるだけか。
打ち上げの方法も、知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）に書いてあったな。
んじゃ、打ち上げの為にWシリーズを少し呼び戻すか。

ブゥン……

「リーダー機、聞こえるか」
「イエス、クリエイター」
「今から衛星を打ち上げる、作業中のWシリーズを五体ほどこちらへ寄越せ」
「了解」

……

……

「来たか、それでは衛星の打ち上げに入る。準備に掛かれ。」
「了解」

いやはや、ほんと、Wシリーズは優秀だわな。
こりゃ基地が出来たら速攻で量産するとしようかね。

「準備完了」

「よし、打ち上げ開始！」
「了解、カウント、5……4……3……2……1……発射」
ドォォォォォ……！
うほ～飛んだ飛んだぁ！
えらい速度だなぁ、音速超えてるんじゃねぇのかあれ。
これなら割かし早く情報を得る事が出来そうだな。
「よし、では、コンソールは館の俺の部屋に運んでおけ。運び終えたら、基地の方の作業に戻れ」
「了解」

うむ、やっぱり情報を制する者は世界を制すだからな。
あの衛星の精度なら、道行く人の顔も確認出来る。
そうなりゃ、誰が誰だか判別付くな。
まぁ、暫くはティファニアとマチルダの捜索をして、見つけ次第二人を確保すると。
んで、後はハルケギニア全体の監視と領地の監視だな。
情報処理用の、小型端末とかも色々創らないといかんな。
そういったのは、機動兵器作るときに併せて創るとしようかね。

……
……

さてと、これで俺も基地が完成するまでは当分はやる事が無くなったな。
何すっかねぇ。
「クラウス様」

「あん？　どした？」
「新しく定住を希望する集団が」
「何人位だ？」
「ざっと確認しましたが、五十人ほど」
「随分多いな、今何処にいる？」
「館の前で待たせてございます」
「わかった、行こう」

さてはて、定住を希望って、一体何者だ？
まだここの領地はそれほど名が知れている訳ではないんだがな。
面倒な連中じゃなきゃいいがな。

……
……

「お前らか、定住希望者ってのはよ」
「貴方は？」
「俺がここの領主のクラウス・フォン・アキテーヌだ」
「左様でございましたか」
「お前らどっから来たんだよ」
「我々はロマリアから参りました」
「ロマリアだぁ？」
「はい」

なんで態々あんなクソ遠い場所から来るんだ？
どう考えてもおかしいだろうよ。
ロマリアからだと、ガリアを横断して来なきゃならないんだぞ。
とてもじゃないけど、身に着けている物や所持品とかを見る限りそうは思えないな。
絶対に何か裏があるな。

「なぁよ」
「……はい」

「ロマリアから来るとなれば、ガリアを横断だ。悪いがよ、とてもじゃないがお前らの服装や所持品を見るとそうは思えねぇんだよ。なぁ、マジで嘘付いてないよな？」

「……」

「言っとくがよ、俺は嘘は嫌いなんでな、嘘付いてるのがわかったらきっちり処罰させて貰うぜ。それでもいいんかよ？」

「……」
「ダンマリじゃわかんねぇぜ」
「……わかりました、お話いたします」

問い詰めた結果、漸くこいつらの本当の出自を聞いたところ、トリステインから逃げてきたらしい。
何でも、領主がどうしようもないクソで、滅茶苦茶な税金を掛けるわ人狩りはやるわでもう大変な状態らしい。
そこの領地にいる村人全員で逃げ出した訳なんだが、途中で半数以上が掴まったか殺されたらしい。
んで、今残ってるのはここにいる五十人て訳だ。

はぁ、難儀なもんだなぁ。
よくみりゃ、あのお嬢ちゃん位のガキ共もいるじゃねぇか。
これだけの人数連れてよく来れたもんだぜ。

とはいえ、本気でこいつらの言い分を全部信じる訳にはいかねぇ

な。
同情引いて、悪さしようとする連中なんぞ腐るほどいるからな。
難儀な状態だとは思うが、これも領地を守る為だ、心を鬼にしねぇと。
嘘発見器創って、きっちり確認するとしよう。

「話はわかった」
「では？」
「だが、はいそうですかと信用するほど俺もバカじゃねぇんだよ」
「そ、そんな……」
「だからよ、今からお前らの検査をする。それで問題が無ければ定住認めてやるよ。」
「け、検査ですか？」
「ああ、んじゃ、必要な物取ってくるから、ここで待ってな」
「はい……」

創造（クリエイト）の能力とかは、あんま人に見せるべき物じゃないからな。
館の中でこっそりとやるとしようかね。

「先ずは嘘発見器の情報からだな、知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）！」

ふむふむ、嘘発見器はこういう仕組みか。
割と単純なんだな。
原理はわかったし、早速創るか。

「機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）！」

え～と嘘発見器はと……お、これだな。
しっかし、嘘発見器なんて使いたくはないんだがな。
まぁ、これも領地を守る為だ、致し方ないか。

「んじゃ創造するか、創造(クリエイト)！」

ポクポクポク……チーン！

ふむ、上手く出来た様だな。
今後も使うだろうからしっかり保管しておこう。
他の奴に取られても、まぁ、使い方分からないだろうしそもそも俺の指紋と声紋が無ければ使えないからな。
しかし、何かあるといけないからな、こういった小型で持ち運べる物の管理は厳重にしておこう。

……

……

「お待たせだ」
「はい」
「んじゃ、まずお前さんからな、これをコメカミに付けろ」
「は、はい」

ふむ、セット完了だな。
それじゃ、指紋認証をと……よし出来た。
後は声紋だな。

「起動」

ブゥン……

よし、成功だ。
それでは、実際に嘘が無いか試していきますかね。

「そんじゃ質問だ、先ほどの話に嘘偽りは無いか」
「はい！」

ふむ、嘘発見器の状態を見ると……うん、大丈夫そうだな。
特に波形にブレもないし、どうやら本当の事のようだ。
念の為、全員しっかり確認しておくとしよう。

確認中……

どうやら全員嘘はついてないようだな。
いやよかった、ここで全員追い返すとかぶっ殺すような事にならなくて。

「ふむ、全員嘘は付いていないと確認が出来た」
「さ、左様でございますか……」
「いや、すまねぇな、俺もこんな事したくは無いんだけどよ。なんせ、同情引いて悪さしようなんて奴もいるからな。」
「い、いえ、当然の事だと思います」
「そうかい、ああ、そうそう、定住だけどな構わんぞ」
「あ、ありがとうございます！」
「一応この先に村あんだけどよ、俺もそこの村を中心に街作ろうと思ってたからよ、お前らもそこに住めや」
「し、しかし、住むにも家が……」
「んなもん、俺がパパっと作ってやるよ」
「我々にはそのような代金は支払えません……」
「金なんざ取るつもりはねぇよ」
「い、いや、しかし……」
「まぁ、とりあえず、ここで話してても埒が明かねぇや。村に行くぞ、付いて来い。ユウ、レイ、アイも来な」

「「「畏まりました」」」

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼村▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

さてと、村に到着っと。
皆頑張って畑耕してるみたいだな。
さてと、親父さんどこかね。

「お～い」
「あ、これは領主様、いらっしゃいませ」
「おう、親父さん、実はよ村人増えるぜ」
「は？」
「こいつらなんだけどよ。どうもトリステインから逃げてきたらしいのさ。」
「よ、よろしくお願いします……」
「左様でございますか、それはさぞ大変だったでしょうなぁ」
「ああ、随分酷い目にあったみたいでな。んでよ、前にも話した通り、この村を拡張するからよ。」
「しかし、家などはいかがいたしますか？」
「俺がパパっと作るわ。まぁ、皆にも手伝って貰う事になるけどよ。」
「畏まりました、お手伝いさせていただきます」
「おう、んじゃ、早速だけどよ場所の選定なんだが」
「それでしたら、この先に野原がございます」
「ふむ、そこにすっか、一応見に行ってみるかね」
「はい、ではご案内いたします」

そうして、村から歩いて十分ほどのところにある野原にやってきた。
特に邪魔になるような木や岩などもなく、ここなら家の建設には丁度いいやな。
んじゃ、場所はここでいいとして、作るときは創造(クリエイト)使わずに錬金で建てるかね。
一応錬金の事は勉強してあるからな、なんとかなるだろ。

「うっし、それじゃ作るが、そういやよ、夫婦とかっているんか？」
「あ、はい、五組ほどおります」
「ふむ、となると夫婦用の家を五棟、他は独身用でいいか。そんじゃ作るぞ～『錬金』！」

土建中……
土建中……
土建中……
土建中……
土建中……

ふぃ～やっぱ魔法は疲れるわ。
これなら創造(クリエイト)で材料作ってやった方が全然楽だな。
とはいえ、あんまり見せる訳にもいかんからな、ここは気合入れて頑張るしかねぇわな。

土建中……
土建中……
土建中……
土建中……
土建中……

だ～疲れた～！
と、とりあえず、必要数は作れたぞ！
これでこいつらもなんとか生活出来るだろうよ。

「ふぃ～お、終わった～」
「ご、ご苦労様です、領主様」
「ああ、とりあえず人数分はあるからよ、まぁ、畑に蒔く種とかは元々の村人から貰ってくれや」
「あ、はい……しかし、よろしいのでしょうか、このような立派な家を頂いて……」
「ああ、構わねぇよ、どうせ元ではタダなんだしよ」
「さ、作用でございますか……本当になんとお礼を申し上げればよいか」
「気にするなって。おいガキ共！」
「「「「は、はい！」」」」
「「「「「はい！」」」」」
「これから此処で暮らすんだからよ、ちゃんと父ちゃんと母ちゃんの手伝いすんだぜ♪」
「ん、元気があってよろしい。あ、そうそう、決まり事なんかの詳しい事は、さっきの親父さんに聞いてくれや。」
「あ、はい、わかりました、あの失礼ですが、税金はどの位なのでしょうか？」
「一割だ」
「へ？」
「だから、一割」
「そ、そんなに安いのですか？！」
「建前上貰ってるだけだからな、これで十分なのさ」
「ト、トリステインでは考えられません……」
「ははは、ゲルマニアの他の領地だってトリステインと変わりゃしねぇよ。ここが特別なだけだ。」

「左様でございますか、よい場所へ来れたようですね、我々は」
「まぁ、後はお前らが頑張るだけだ、気張ってやれや」
「はい、本当にありがとうございます」

ふむ、これでなんとかやってけるかね。
まぁ、一応細かい事なんかは親父さんに伝えてあるからな。
あの人達も、まぁ、俺に喧嘩売るような事はしねぇだろ。
なんせ、ハルケギニアじゃ破格の領地だからな。
態々他へ移るような、アホな真似はしないだろ。

さてと、村の拡張はなんとか目処がついたし、俺は引き続き秘密基地の建設に従事しますかね。
今のところは必要な物はないし、まぁ、一休みといったところか。
なんせ、こっち来て以降働きづめだったからなぁ。
ここらで少し休みを入れておかないと……て、そうだ！
風呂作らなきゃ！
しまった～此処最近はお湯で体拭くだけだったからなぁ。
やっぱ日本人としては風呂は欠かせないからな！
となれば、風呂を創るか！

「うっし、そうと決まれば知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）！」

ふむふむ、風呂はなんとかなりそうだな。
問題は燃料をどうするかだが……何かいい方法はないかねぇ。

……
……

その後も知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）で方法を探したところ、地熱を利用するいい方法があったのでそれを利用する事にした。

ボタン一つで操作出来るので、ユウ達も問題なく使えるだろう。
湯船の外観についてだがこれはもうあれだ、檜風呂に決定！
やっぱ日本人だからな、これは外せねぇぜ！
後は創る場所だが、館の敷地内に小屋建ててそこに創る事にする。
まぁ、小屋って言っても露天風呂クラスにでかいがな。
うっしゃ、気合入れて創るぜぃ！

創造中……
創造中……
創造中……

ふぃ～漸く終わったか。
なかなかにいい出来栄えだな！
うっし、それじゃ一番風呂といきますかね！

……
……

カポーン……

「うぃ～極楽だぜぇ～……」

やっぱ大きい風呂はいいねぃ……
これで綺麗なねぇちゃんでもいりゃ最高だわな、ははは。

「あ、そうだ、日本酒造ろう、知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）！」

え～と日本酒の造り方と……ふむふむ、なるほど、把握したぜ。
うっし、んじゃさくっと創るか。

「創造(クリエイト)！」

ポクポクポク……チーン！

「え～と、後はコップ創ってと……うっし、完成！　さて、一杯やるかね……かぁ～うめぇ～♪」

いや～やっぱ日本酒最高～！
ワインも悪かねぇけど、やっぱ風呂で飲むなら日本酒に限るぜ！

「いや～ある種、最高の贅沢って奴だぜ！」

ちなみにこの風呂だが、男湯と女湯、それと混浴を創ったぜ。
お湯も出るし、シャワーも完備！
更にはサウナまで完備だぜ！
やっぱせっかくの能力だからな、こういう事に使わないと勿体ねぇやな！
そうだ、せっかくだしユウ達も入らせるか。

……

……

「お～い、ユウ、レイ、アイ、いるか～」
「はい、クラウス様」
「お前ら風呂入ってないだろ、さっき作ったからよ、入ってこいや」
「お、お風呂ですか？」
「おう！　自慢じゃねぇが、なかなかの出来栄えだぜ！」
「し、しかし、私達(わたくし)のような者が……」
「いいんだよ、せっかく創ったんだからよ。ああ、それと、替えの下着とか服を持って来い。」

「畏まりました」

全く、遠慮なんぞする必要ねぇのにな。
やっぱよ、疲れた仕事の後は風呂に入ってのんびりするのが一番いいやな。
彼女らも女なんだし、身だしなみにゃ気をつけねぇとよ。

「お待たせいたしました」
「おう、んじゃ付いてきな」

……
……

「こっちが女専用の風呂な、こっちは男専用だ」
「分かれているのですか？」
「おう！　んじゃ中に入って説明すんぞ」
「あ、はい」

こうして、湯船のつかり方やシャワーの使い方などを説明してやったぜ。
まぁ、シャワーの部分で大分驚いていたがな。
なんせ捻ればお湯出るんだもんな。
ハルケギニアじゃ、ありえないだろうさ。

何れ折を見て、館も改造しまくって水道を完備するとしよう。
後はあれだな、トイレも水洗化して、温水便座付けるとしようかね。
やべ、夢広がりんぐ！

「す、凄いですわね……」

「お湯が出るなんて……」
「こんなの見た事も聞いた事もないです……」
「ははは、そうだろうよ。まぁ、何時でも好きに使ってくれや。」
「し、しかし燃料代などが……」
「ああ、これな、燃料いらんのよ、なんせ地熱利用だからな！」
「地熱？」
「ああ、地面の熱を使ってるのさ。まぁ、詳しく説明するとややこしいから省くがな。」

こうして三人も風呂に入った訳なんだが、俺が出てく前に脱ぐなっつの！
思わず説教したくなってしまったぜ……
どうもこいつら、こういった部分で世間ずれしているような気がしてならん。
うむむ、早いうちに矯正しなければいかんな。

つか、あれかな、村が大きくなったら公衆浴場でも作るかね。
銭湯みたいな感じでな。
そうすりゃ管理人と番台とかで雇用も生まれるし。
となると、やっぱコーヒー牛乳とフルーツ牛乳は必須だな、後は扇風機か！
やっべ、めっちゃ楽しみになってきた！

まぁ、公衆浴場については、もう少し村が拡張してからだな。
今のところ村人も少ないし、まだまだ拡張するだろうからあんま大きな建物があっても拡張の邪魔になるかな。
領地の評判が良くなれば、自然と人も集まってくるだろうしな。
勿論、外部に本拠を置く商人とかには税金は普通に掛けるけどな。
商人を甘やかすと何するかわからんからな。
〆るとこはきっちり〆ておかねばいかん。

早めに領内の法律とかも作っておくか。
やれやれ、やる事は尽きねぇな。

秘密基地建設続行中……ポロリもあるよ！（後書き）

風呂の部分については、完全な創作です。あんまり細かく設定してもあれなのでさくっと創りました。
それと、銭湯のシーンのコーヒー牛乳とフルーツ牛乳ですが、これは作者的には外せません。異論は認めますが。
本来この話で基地も完成させたかったのですが、まぁ、あんまり早すぎてもあれなので、もう二話くらい引っ張ります。
その間に、色々と他の事を決めていく予定です。

では、次回またよろしくお願いしますノシ

陰謀をぶっ潰せ！（前書き）

今回はオリキャラが一人でます。といってもただのかませ犬ですので、今回限りの登場ではあります。

陰謀をぶっ潰せ！

基地の建設開始から、一ヶ月が経過した。
現時点で基地の完成度は、約四十パーセントといったところか。
流石に広すぎる事もあり、Wシリーズとはいえ少々予定より遅れているようだ。
まぁ、こればっかりは仕方が無い。
多少遅れたとしても、完璧な物を作らないとな。

それと、中央に納める税金はしっかり送りつけておいた。
規定額をしっかり払ったので、向こうも文句をいう事もなく無事に完遂した。
まぁ、なんぞ変な噂になってるかもしれんけど、無視だ無視。

さて、今は何をしているかと言うと領内の法律を作っている。
あまりごちゃごちゃしていても分かり辛いので、シンプルかつ公平な法律を目指している。
勿論今後は行政機関として、司法機関なども作る予定ではあるが今の所は俺のワンマン経営だ。
まぁ、領主なんてそんなものだろう。

「ふ～む……」
「クラウス様、お茶をお持ちいたしました」
「お、レイか、さんきゅ～」

家のお茶は紅茶ではなく緑茶だ。
これも俺の創造（クリエイト）で、茶葉を作り出し必要な器具を揃え入れて貰っている。
まぁ、やっぱ日本人だからな、日本食が恋しくなる訳ですよ。

試しに梅干や味噌なんかも作ってみたが、割と好評だったのには驚いた。
あれかね、外人がスシを食いたがるノリなのかね。

「うっし、こんなもんかな」
「出来たのですか？」
「ああ、まぁ、犯罪者にはかなり厳しい内容だがな」

考え付いた法律はこんな感じだ。

壱：領内における以下の行為は理由の如何に関わらず死刑
窃盗、強盗、恐喝、収賄、市場価格操作、不法占拠
不法滞在、暴行、婦女暴行、誘拐、奴隷販売、殺人

弐：入国の際は審査を受ける

参：定住希望者は領主直属の審査を受ける
→合格した際は家屋を無償提供

四：居住者は全て居住者用カードが必要
→身分証明となる
→紛失などの再発行には再度の審査が必要

伍：行政サービス、医療機関での治療を受ける際は居住者用カードが必須

六：定住者は税率一割、外部に本部を置く組織は組織の内容に関わらず税率四割

七：商人には商業税三割が別に加算される

八：商人は商人用カードが別途必要
↓商業許可証となる
↓紛失などの再発行の場合は再度の審査が必要
↓許可証が無い場合は即刻営業停止

九：商人は毎月の収支などの帳簿を提出する義務がある
↓偽った場合は、罰金としてその月の売り上げ全てを取り上げる
↓拒否した場合は終身刑

十：三ヶ月に一度査察あり
↓時期は公表しない
↓帳簿などをチェックする

十一：外部からの入領者は検問で審査を受け、合格した場合に限り入領を許可される
↓その際入領者用カードが配布される
↓出領の際に返却必須
↓返却しない場合は翌日に失効
↓次回以降の入領不可、場合によっては拘束

十二：上記法律は領内にいる領主以外の全ての人民に適用される
↓貴族であっても同様

こんなものか。
かなり厳しいように思えるが、要は悪い事しなきゃいいんだしな。
商人に対しては、かなり厳しいけど、甘やかすと付け上がるからな、これくらいの締め付けは必要だ。

まぁ、今いる村人でこれを守らないアホはいないと思うがな。

「こんな感じだわ」
「……凄いですね」
「まぁ、要は悪い事すんなってこった。貴族だろうがなんだろうが適用されっからな。」
「でも、ちゃっかりとご自分は外されてますね」
「当たり前だ、第一俺は悪い事する気なんて更々ないしな」
「そうですわね」
「そういや、レイはどうよ」
「何がですか？」
「今の暮らしだよ」

「……そうですね、奴隷になった時はもう諦めてました。でも今は……毎日が充実しています。」

「そうかい、そりゃ何よりだな。まぁ、レイも見た目はいいんだからよ、早く旦那見つけろやな♪」

「も、もう、からかわないで下さい！」
「ははは♪」

ほんと、レイの奴もなんてーのか明るくなったよな。
ユウとレイとアイも、仲良くなったようだし、結構話してるとこを見かけるようになったよなぁ。
レイとアイも漸く本性現したって事か。
いやはや、ほんと、賑やかでいいこったな。

ブゥン……

「作業状況を報告いたします」

「おう」
「基地の完成度は現在四十六パーセント、作業の遅延は四パーセントほどとなります」
「急がせろ、可能な限り期日内に完成させろ」
「了解」

ふむ、まぁ四パーセントほどの遅れなら、大体一ヶ月で完成するだろう。
Wシリーズはほぼ不眠不休だからなぁ。
メンテも必要ないように、創造（クリエイト）の際に改造しといたしな。
エネルギーだけは必要だけど、それも大気中の成分と光をエネルギーにするから別段補給の必要性が無い。

ぶっちゃけ、滅茶苦茶クリーンなんだよな、あいつらって。
それに完璧にロボットだもんで、故障しても別段心も痛まないしな。

そういや、そろそろ領主直属護衛機も作っておくかな。
頭の中身はＡＩにして、独自の判断能力も持たせた方がいざって時に役に立つかな。
まぁ、領主の生命の保全と安全を最優先事項としておけば問題ないだろうな。

それと、法律の方は基地の完成を待って発布しよう。
居住者用カードとかを作るには、基地の設備が必要だからな。
ディテクトマジックで解析出来ないように術式組み込むつもりだ。
あれだ、虚無魔法の『ディスペル・マジック』の術式組み込んで魔法が通じないようにする。

勿論、Wシリーズの各種武装、俺の武装や機動兵器にも同じ術式

を組み込む。
そうしておけば、戦闘の際は非常に有利だろう。
術式の組み込みも武装やカードに関しては生産工場で、機動兵器については創造（クリエイト）で作る時点で組み込めばいい。
幸い知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）を使って、術式自体は組みあがっているしな。
いやしっかし、こうして考えてみるとこのまま世界に戦争ふっかけて、独立国家にしてもいいんじゃねと思うな。

まぁ、ハルケギニア程度なら余裕で統一できっからなぁ。
マジで考えておくべきかなぁ。
統一はせずとも、とりあえずゲルマニアから独立するとか、ゲルマニアを丸ごと併呑するとかな。
まぁ、皇帝とか国王とかは面倒だからやりたくはないけど。
暫くは今の領地で頑張るとしようかね。
今後はどうなるかわからんけど。

それと、あれだ、基地の方が一段落したら海底に刑務所作ろう。
海底ならば絶対に脱出出来ないだろうしな。
場合によっては、喧嘩売ってきたアホをそこにぶち込めばいいだろう。
魔法が使えない術式を刑務所全体に張り巡らせておけば、何かあっても大丈夫だろうしな。
まぁ、Wシリーズがいれば問題ないだろうけど。

唯一の懸念事項とすれば、『ルイズ』と『才人』か。
どっちも喧嘩売ってくれれば潰すだけだが、色々と面倒臭そうだしなぁ。
一応ティファニアをこちらに連れてきたら、以後は魔法学院を逐一監視する事にしよう。

今のところティファニアに接触する人間はいないが、早めに確保しておくに越した事はないだろう。
基地が完成したら、速攻で連れに行こう。
幸いマチルダの居場所もわかってるしな。
ティファニアを連れに行く前に、マチルダに何か手紙でも出しておびき寄せて二人共連れてくればいいだろう。

丁度俺も秘書が欲しいところだしな、彼女なら月百エキューで雇ってもいいし。
なんとしても、あの二人を確保しなければな。

……

……

「クラウス様、お客様です」
「客？　誰だ？」
「中央政府から派遣されたそうですが」
「中央から？　わかった、今行く」

多分、もっと税金払えとかそういう事だろうさ。
はぁ、面倒臭せぇなぁ。

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼客間▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ふむ、あいつがそうか。
一応椅子に仕込んだ嘘発見器を作動させておくか。

「お待たせしました」

「おお、態々申し訳ございませんな」
「で、用件は何ですかね」
「ええ、実はですな……」

そうして聞いた内容からすると、ここの前の領主である『ゲーヴィッツ伯爵』が領地と伯爵位の返還を求めているそうだ。

返還されない場合は、更に課金せよという事らしい。
……アホか。
頭おかしいんじゃねぇのか、そいつ。

「なぁ、そんなんまかり通ると思ってるのか？」
「はぁ、私どもとしてもどうあっても無理だと申し上げたのですが」
「そのバカが強要した訳か……」
「はい……」

ふん、嘘は言ってないな。
どうやら、そのバカの独断のようだな。
全く、バカだと思ってたがここまでバカだったとはな。

「政府側はなんて言ってんだ？」
「当事者同士で解決せよと」
「なるほどな」
「それと、ツェルプストー辺境伯様からこれを」
「ツェルプストー辺境伯から？」

内容を読んでみると、なんでもゲーヴィッツとかいうバカはかなり酷い奴のようだ。
政府内部でもやりたい放題の状態らしい。
なんでそんな奴が放置されているのかと言えば、どうも奴の家系

が問題らしく、なかなか手が出し辛いようだ。
んで、なぜツェルプストー辺境伯が態々この件に絡んで来たかと言えば、どうもキュルケにゲーヴィッツがちょっかい出しているらしい。
というのも、何やらよくわからんが、結婚を迫っているようだ。
なるほどねぇ、原作にあったキュルケがトリステイン魔法学院に逃げ込んだ理由って最終的にこれだった訳か。
まぁ、実際に原作通りじゃないと思うけど、恐らく流れ的には同じなんだろうな。
んで続きを読むと、今回ゲーヴィッツのしでかした事は爵位を購入すると言うある意味国の根幹にも関わる部分において勝手な真似をしている為、皇帝側も奴を見限るらしく今回の俺の件と娘の件を併せて奴を捕縛するそうだ。
捕縛に際しては、俺が先ず奴と会い奴を激高させるなりで奴に杖を抜かせる。
そうすれば、政府内部で杖を抜いた事と現伯爵に対して杖を抜いた事で大義名分が出来るそうだ。
まぁ、結婚迫った位じゃ普通は捕縛は難しいと思うから俺の件を利用しようと言う訳だな。
しょうがねぇとは思うが、手紙に書いてある続きを読むと、奴の求婚の仕方が酷いようだ。
悪質極まる内容で、キュルケもかなり悩んでいるらしい。
……はぁ、クズだと思っていたが、男としてもクズだな。
捕縛じゃなくて、打ち殺しでいいんじゃねぇのかねぇ。

まぁ、殺すと色々面倒なんだろうからしょうがないとは思うが……
しかし、ただ単純に捕縛しただけでは、反省したとは言いがたいな。
いっそ、玉と竿を潰すか……うん、そうしよう。
そうすれば、以後、あのクズの為に苦しむ人も若干は減るだろうしな。
うっし、捕縛する前に玉と竿潰してやろう。
キュルケの恨みもある事だしな。

「内容はわかった、こりゃツェルプストー辺境伯に協力しない訳にはいかんな」
「左様でございますか、辺境伯もお喜びになるでしょう」
「そういや、あんたはよ、どうすんだ？」
「一先ずは一時身を隠します」
「だろうな、それがいいわ」
「申し訳ございません、お手伝い出来ず」
「構わねぇよ、まぁ、気をつけな」
「はい、では私はこれにて失礼いたします。御武運を……」
「おうよ」

……

さてと、それじゃ早速向かうとしますかね。
どうもツェルプストー辺境伯は、今時点で首都にいるようだから、首都の宿屋で落ち合う事にしたようだ。
そこで、最終確認をした上であのクズの男としての機能を殺し、そのまま捕縛すると。
まぁ、今まで散々悪さしてきたんだ、そろそろ年貢の納め時って奴だよな。

「ユウ、少し出てくるぞ」
「あの、どちらに？」
「中央だ、どうもクズの捕り物があるようでな」
「左様でございますか、どうかお気をつけていってらっしゃいませ」
「ああ、なるべく早く帰ってくるわ。飯の用意と風呂の用意頼むな。」
「はい、お任せ下さいませ♪」
「おう、じゃあ、行って来るぜ！」

さぁ、覚悟しろよクズ野郎め！
俺の領地に手出した事、キュルケに手出した事、その他諸々の罪、きっちり払わせてやるぜ！

……
……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼首都ヴィンドボナ：宿屋▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

指定された場所はここか。
確か、合言葉を言えばいいんだったな。
しかしまぁ、合言葉なんて随分古典的だわな。

「待て」
「ツェルプストー辺境伯に呼ばれた、アキテーヌ伯爵だ、通せ」
「合言葉を」
『火の精霊に感謝を』
「どうぞ」

おうおう、あれがツェルプストー辺境伯か、思ったよりも随分と

若いな。
それに奥にいるのは……キュルケか。
また随分とやつれてるな。
それほど酷いのか、可愛そうによ。
まぁ、あのクズ野郎にはきっちりツケ払わせてやるからよ。

「初めましてだな、ツェルプストー辺境伯。まぁ、同じ伯爵同士仲良くしようや。おっと、口が悪いのは勘弁してくれ、生まれつきなもんでな。」

「ああ、初めまして、アキテーヌ伯爵。私としても変に畏まられるよりいい。しかし、申し訳ない、今回は君の事を利用する形になってしまって。」

「構わねぇよ、俺もあのクズ野郎には頭きてたからよ」
「そうか」
「それに手紙読んだぜ。娘さん、随分苦しい思いしたみてぇだな。」
「ああ、許せんよ」
「女にそんな真似するとはよ、男の腐った野郎だぜ」
「全くその通りだ」

キュルケもアニメじゃ凄く綺麗なのに、今はなんてのかボロボロな感じだな。
まるで、麻薬でボロボロになった患者みてぇだわ。
頬もやつれてるし、目も虚ろだしなぁ。
ここまでなるほど精神的に追い詰められるって事は相当なもんだろ。
全く、許せねぇな。
「キュルケ嬢よ、野郎は俺がきっちりと始末付けてやるよ。だから、

元気だしな。」
「……あ、貴方、は」
「俺はクラウス・フォン・アキテーヌ、まぁ、お前さんの親父さんと同じ伯爵やってるもんだ。あのクズ野郎をこれからぶっちめに行くところさ。」

「……わ、私を助けて、くれるの」
「おう！　任せな！！」
「……うぅ……うぁぁぁぁん……」
「泣きたければ好きなだけ泣きな、胸くらいなら貸してやっからよ」
「ああう……あああああああ！」

キュルケの絶叫は十分ほど続いた。
泣き終わったら、寝ちまったよ。
余程疲れてたんだろうな。
全く、マジでぶっ殺すべきか、あのクズ野郎はよ！

「……まさかキュルケがああも泣くとは。親として守ってやれなかったのが恥ずかしい。」

「それでもあんたは、あの娘を守ろうとしてたんだろ？　なら恥じるこっちゃねぇよ。」

「そう言って貰えると、幾分かは心が休まる」
「まぁ、俺でよければ何時でも相談乗るぜ」
「ああ、すまないな……」
「気にするな、同じ伯爵じゃねぇか、仲良くやろうぜ！」
「そうだな」

ツェルプストー辺境伯は、かなりまともな部類だな。
娘の事を考えて、今度のような行動起こせるってのはなかなか肝が据わってるぜ。
この人なら、懇意にしてもいいかもしれねぇな。
「じゃあ、俺が奴と話しをするからよ、打ち合わせ通り頼むわ」
「ああ」
さてと、それじゃいよいよ年貢の納め時だぜゲーヴィッツよ。
覚悟しろよ、きっちりと送ってやるからよ！
……
▼▼▼▼▼▼▼▼▼政府・待合室▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「ええい、遅い！　アキテーヌはまだか！」
「使いの者は既に到着しているはずですので、もうまもなくかと」
「わしが自ら出向いているというのに……それにツェルプストーの娘も……全く、わしを誰だと思っておるのだ！」
……
「ゲーヴィッツ伯爵、アキテーヌ伯爵がお見えになりました」
「通せ！」
「失礼するぜ」
「貴様がアキテーヌか」
「ああ、そうだ」
「まぁ、遅れた事は特別に許してやろう、勿論それなりの詫びは入

れて貰うがな。用件はわかっているな。」
「ああ、追加で払えってんだろ」
「……そうだ、さぁ、さっさと払って貰おうか、わしも忙しいのでな」
「てめぇは真性のバカか？　誰が払うっつったよ」
「何？」
「てめぇに払う銭なんぞ、ビタ一文ねぇんだよ、クズ野郎が！」
「き、貴様、一体誰に向かって物を言っている！」
「目の前のクズだな。いや、クズも燃やせば燃料になるからな、不燃物か？」
「き、きききき、貴様あああああ！」

チャ！

お、抜きやがったな！
ならこっちも遠慮しねぇ！

スラッ！……チャキ！

「おおっと、動くなよ、動くと首と胴がおさらばだぜ、クズ野郎」
「き、貴様、一体何を！」
「うるせぇな、黙れよ、誰が口開いていいっつったよ」
「くっ！」

ドカッ！

「ぐあ！」
「さてと、杖は預かっておくぜ」
「き、貴様、こんな事をしてただで済むと！」

「思ってるんだよ、ツェルプストー辺境伯！」

バタンッ！

「ゲーヴィッツ、貴様も今日で終わりだ！」
「ツェルプストー辺境伯？！　なぜここに！」
「貴様に対しては、皇帝陛下より捕縛状が出ている、大人しくするのだな！」
「な、何だと？　皇帝陛下がわしに捕縛状だと？　そんなバカな……」
「これが捕縛状だ！」

ピラッ！

「……ま、まさか、皇帝陛下がわしを見捨てたのか？！　わしを誰だと『黙れ！』」
「さっきからごちゃごちゃとうるせぇんだよ、クズ野郎め」
「き、貴様！」

「随分とまぁ好き勝手にやってたみたいじゃねぇか、俺のとこの領民からも聞いたぜ、てめぇの横暴っぷりをよ。そのうえなんだぁ、キュルケにあんな真似しやがって、この最低の蛆虫が、てめぇなんざ男じゃねぇ！！」

グシャ！！！

「ぎゃあああああああ！」
「おら、もっと苦しめや、ああ！」

グリグリ……

「ヒ、ヒィィィギャァァァァァァ！！！」

「キュルケが苦しんだ分と、俺の領地の領民が苦しんだ分、それと今までてめぇに苦しめられた人達の恨みの分だ、しっかり受け取れや！」

グシャ！！！

「ヒギャアアアアアアアアァァァァァァァァァァァァッァァ………………」

ふん、玉潰されて気絶しやがったか。
いい気味だぜ。
こんな男の腐った野郎は、この世に存在する価値はねぇからな。
さっさとご退場いただくに限るぜ。

「し、死んだのか？」
「いや、生きてるぜ、まぁ、男としては死んだがな」
「男としてか……は、ははは、はははは、そいつはいい、実に愉快だな！」
「だろう、下手にぶん殴るよりこっちのが効くだろ♪」
「ああ、全くだ、いや実に愉快、ははははは！」
「おら衛兵、ぼーと突っ立ってねぇでさっさとこのクズ運びな！」
「は、ははっ！」

これで今回の一件も解決だし、キュルケも元の明るさを取り戻すだろう。
目出度し目出度しってところかね。

「しかし、君は若いのに肝が据わっているな」
「はん、クソの掃き溜めのような貴族社会で生き残る為には、舐められる訳にはいかねぇんだよ」

「確かにな」

「まぁ、後は司法官の仕事だろう、ツェルプストー辺境伯もさっさとキュルケのとこ戻ってやれよ」

「うむ、よければどうかね、一度私の別宅に来てはくれないか？礼もしたいしな」

「別に礼を言われるような事は何もしてねぇよ」
「そう言うな、今回の件があったからこそ、奴を捕らえられたのだからな」
「わぁったよ、んじゃお言葉に甘えてご一緒させて頂くとするさ」
「そうか、ならば早速行くとしよう」
「あいよ」

こうして、なんだかよくわからんが、ツェルプストー辺境伯の別宅にご招待される事になった。
まぁ、何れは俺も別宅持たなきゃならんのだろうが、今はまぁいいかね。

……
……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼宿屋▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「キュルケ！」

「……お、お父、さま」
「喜べ、奴は捕縛された！」
「……え」

「ああ、約束通りきっちり捕まえたぜ。序にあの野郎の玉潰してな、男として殺してやったぜ、ははは！」

「そ、それじゃ、もう……」
「ああ、奴に悩まされる事は無い。今まですまなかった、無力な父を許してくれ……」
「あ、ああ、うあああああ……！」

いや～よかったよかった、これで目出度しだな。
なんつーのか、青臭いけどよ、やっぱ女は笑顔がいいよな。
今回の件で、キュルケと友達位になれりゃ、俺としても嬉しい限りだな。
しかしほんと、よかったぜ。

「よかったな、ツェルプストー辺境伯」
「ああ、ありがとう、アキテーヌ伯爵」
「ああ、俺の事はクラウスでいいぜ、一々伯爵なんて呼ばれてたら背中が痒くならぁ」
「なら私の事も、ゲイズと呼んでくれ」
「おうそうかい、んじゃ、そうさせて貰うぜゲイズさんよ」
「ああ、クラウス殿」
「あ、あの、アキテーヌ伯爵様」
「あん？」
「ほ、本当に、ありがとう、ございました……このご恩は……」

「けっ！　よせやい、恩になんぞ感じる必要はねぇよ、俺がやりて

ぇからやっただけだ！」
「で、でも……」
「それとな、何時までもそんな面してねぇで、もっと笑えや、な」
「……！」
「せっかくの美人が台無しだぜ、キュルケ嬢よ」
「はははは、クラウス殿は親の前で娘を口説くか！」
「んなんじゃねぇって」
「ふう、そうか。さ、別邸へ行くとしよう、今日は祝いだ♪」
「は、はい♪」
「あいよ」

……

…………

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼ツェルプストー辺境伯別邸▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ここがツェルプストー辺境伯の別邸か、随分とまぁ豪華だな。
俺は元々贅沢をするつもりはないからな、調度品とかは最低限しかないからなぁ。
まぁ、メイド三人の部屋は女の部屋らしくしてやるべきかな。
今度ゆっくり考えてみるかね。

「あなた」
「うむ、今戻った」
「ゲイズさんよ、そちらさんは？」
「ああ、私の妻だ」
「そうかい、俺はクラウス・フォン・アキテーヌってんだ、よろしく頼むぜ」

「貴方が……申し遅れました、妻のエリーゼ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーでございます」

「お母様」

「キュルケ！　まぁ、随分元気になって、安心したわ……本当に……」

お～お～抱き合っちまったよ、奥さんも随分と心配してたみてぇだな。

まぁ、それも無理ねぇよな。

なんせ、あの状態じゃなぁ。

誰だって心配するわな。

「クラウス殿は今回の捕縛に協力してくれた事もあり、また、キュルケの事でも世話になったのでな、せめてもの礼として食事にご招待したのだ」

「まぁ、そうでしたの、ありがとうございます、娘がお世話になったようでなんとお礼を申し上げればよいか」

「別に構わねぇさ。娘さん、元気になって良かったな。まぁ、俺としてもキュルケみたいな美人と知り合えて役得ってもんだな、ははは！」

「まぁお上手ね♪」

「別に世辞じゃねぇよ、俺は本心しか言わねぇんでな、特に女に対してはよ」

そうそう、死んだじいちゃんが女に嘘付くなってよく言ってたか

らなぁ。
そのせいでよくばあちゃんに説教されてたな。
「さぁ、今日は楽しもう」
「んじゃ、馳走になりますかね」
（お母様、少々お話が）
（わかりました、貴女の部屋に行きましょう）
「それでは、私（わたくし）とキュルケは化粧直しをして参りますわ、さ、行きますわよキュルケ」
「はい、お母様」
……
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼キュルケの部屋▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「キュルケ、貴女、アキテーヌ伯爵に惚れたわね」
「……やはり、お母様にはお分かりになりますのね」
「当たり前です、私（わたくし）は貴女の母ですよ。で、どうしてアキテーヌ伯爵様に惚れたのかしら？」
「じ、実は……」
お母様に、アキテーヌ伯爵様に言われた事を話した。
だ、だって、あんな状態のときにあんな事言われれば、誰だって惚れるわよ！
そのうえ、あの方の胸で泣いてしまったし……
それに、アキテーヌ伯爵様って見た目もいいし、お父様の調べで

は財力もあって魔法の腕も確かで領民にも慕われている。
そんな人にあれだけ優しくされしまっては、好きにならないはずがないわ！
「そう、そんな事が……」
「はい、だから私の中の炎があの時に燃え上がってしまいましたの」
「ならば必ず射止めなさい、ツェルプストーの女としてね」
「お母様……」
「あの若さで伯爵位と領地を購入できる程の財力、それを生み出す頭脳や魔法の腕、そして領民に慕われる人柄、どれを取っても申し分ないわ！　いいことキュルケ、他の女に取られる前に必ず射止めるのですよ！！」
「は、はい！」
……
……
▼▼▼▼▼▼▼▼▼食堂▼▼▼▼▼▼▼▼▼
ほ～こらまた随分と凄い食堂だな。
家は四人しかいねぇからなぁ、どうにも質素なもんだから別の人の家来るとどうも比較してしまうな。
まぁ、無理に華美にする必要は無いけどよ。
「しかし、クラウス殿は剣を杖にしているのか」
「ああ、ただの杖じゃ役に立たないからな。やっぱ実戦で役立つ物

じゃなきゃよ。」
「ふむ」
「まぁ、男の喧嘩は最後には拳だろ！」
「ははは、そうだな」

ギィ……

「お待たせいたしました、あなた、アキテーヌ伯爵様」
「お待たせいたしました」
「おお～こりゃまた随分と綺麗じゃねぇか、似合うぜ、キュルケ嬢」
「も、もう、アキテーヌ様ったら、恥ずかしいですわ♪」

いや～ドレスがよく似合うわ。
流石は貴族の令嬢だけの事はあるな。
褐色の肌に、よく似合うわ。

「いいねぇ、将来キュルケ嬢を嫁さんに貰う男は幸せ者だな」
「そういえば、クラウス殿は婚約者などはいるのかね？」
「いいや、俺はまだ結婚とか考えてないからな、何せ領地が忙しくてよ」
「そうか。そういえば、領地を購入して一ヶ月程度であったな。」
「ああ、家屋の修繕やら法律の制定、税制の改革などなどやる事山積みだ」
「ふむ、家臣はいないのか？」
「使用人と呼べるのが三人だけだな」
「そ、それでは流石に支障があるだろう」
「といってもねぇ、伝も無いし今のところ不自由してないからな」
「ふむ……」

炊事なんかはユウ達がやってくれてるし、領内の事については俺

がやればいいしな。
警備に関しては、Wシリーズを投入すりゃいいし、ほんと今のところ人員不足で困る事は無いんだよな。

まぁ、あるとすれば家屋を建てる時に、俺一人じゃ時間が掛かりすぎるって事位かね。

「しかし、体面もあるからな、早めに家臣は雇うべきだぞ」
「そうなんだけどな、まぁその内雇う事になんだろうさ」
「あの、アキテーヌ様」
「あんだ、キュルケ嬢」
「アキテーヌ様は、どのような女性が好みですの？」
「また直球な質問だな、おい」
「あ、申し訳ありません、少し気になって」
「あ～女の好みねぇ……優しい女だな。後、胸はでかいのが好みだ！」
「ははは、随分とはっきり言うな」
「誤魔化してもしょうがねぇしな」

胸については私は大丈夫ね！
スタイルについては自信あるわ！
優しいかどうかは……わからないけど、これから変えていけばいいわ！
これならば、私にもチャンスはあるわね！

「そういえば、クラウス殿はお幾つなのだ？」
「十六だな、今年で十七か？」
「キュルケと同じだったのか」
「まぁ、驚くわな普通」
「出身はどこなのだ？」

「東方、ロバ・アル・カリイエだよ」
「ほう、随分と遠方だな」
「まぁ、色々とあってな、こっちに流れて来た訳よ」
「ふむ……」

実際には現実世界だがな。
まぁ、現実世界の事を言ってもわからないだろうし、ここは東方にしとくのが無難だろうさ。
あんま嘘は付きたくねぇが、これに関してはしょうがねぇだろうな。

「東方に戻るつもりはあるのかね？」
「ねぇよ、じゃなきゃ爵位なんて買わないって」
「それもそうだな」
「そういやよ、一つ聞きたい事あんだけどいいか？」
「なんだね」
「この国の皇帝だがよ、実際どうなんだ？」
「どう、とは？」
「長年貴族やってるゲイズさんから見て、皇帝はどうなのかなと」
「……ふむ、ここからは内密な話だが、よろしいか」
「ああ」

そうしてゲイズさんが話した内容は、結構衝撃的というかヤバイ内容だった。
どうも今の皇帝は猜疑心が強いのだが、それが強すぎるようだ。
その為、ほとんどの家臣を信用せず、また身内すら投獄や処刑する始末。
はっきり言って、今のままではゲルマニアは危険な状態になりかねないそうだ。

まぁ、そうだよなぁ。
国家元首が下の者を信用しないなんて、国としては終わってるからな。
しかし、アニメじゃ語られる事はなかったが、ゲルマニアがそんな状態だったとはな。
Ｗｉｋｉでも少し書いてあったが、あんまりゲルマニアの事って書かれていなかったからなぁ。
いやはや、住めば都とは言うが、どうもそういう訳にはいかなそうだな。

「なんともはや、どうしようもねぇな」
「ああ、下手をすれば反乱に繋がりかねんよ」
「やれやれ、どこもかしこも頭がそれじゃなぁ」
「嘆かわしい事だ」
「辺境伯なんて立場のゲイズさんがそう言うとなると、相当なもんだな」
「うむ」

こりゃ、ひょっとするとひょっとするかもしれんなぁ。
早めに基地の建設終わらせて、戦力を充実させておかないと不味いかもしれん。
やれやれ、面倒な国に来てしまったものだ。

「あの、アキテーヌ様」
「あん？」
「ア、アキテーヌ様は、好きな女性はいらっしゃるの？」
「いるにはいるぞ、片思いだがな」
「そ、それは誰ですの？」

「う～ん、三人いてな、内二人はどうあっても名前は明かせない、

色々込み入った事情があってな」
「な、なら、最後の一人は？！」
「言わなきゃ駄目か？」
「駄目です！」
「諦めた方がいいぞ、ツェルプストーの女はこういう事にはしつこいからな」
「今実感してるよ」

つってもなぁ、片思いなの目の前にいるお前さんなんだけどキュルケよ。
流石に両親いる前で告白ってのはなぁ。
う～ん、恥ずかしいというかなんというか……
まぁ、どちらにしろ、俺も何時かは結婚しなきゃならないのは確かだしなぁ。
ここらで縁を作っておくべきかもしれんな。
うっし、俺も男だ、はっきりさせようじゃねぇか！

「わかった、俺の負けだ、言うよ」
「……ゴク」
「最後の一人はな……お前さんだよ、キュルケ嬢」
「……へ？」
「だから、お前だってば」
「わ、私？」
「ああ」
「で、でもどうして、私とアキテーヌ様は」
「ああ、実際に会うのは今日が初めてだけどな。でも、俺はお前の事知ってたんだよ、だから片思いだって言ったのさ。」

あ～言っちまったな。
まぁ、いいっか。
キュルケが好きなのはマジだしな。
あれだ、俺も領主なんてやってんだから、こういう事は慣れておくべきだろうしな。
うむ、一度決心付くとどうとでもなるもんだぜ、ははは！

「うふふ、よかったわねキュルケ」
「うむ、よかったな、キュルケよ」
「はい、お母様、お父様……」
「ど、どういう事だ？」
「わ、私も、アキテーヌ様の事……す、好きです……本気で惚れております」
「……マジ？」
「はい……」

おいおい、マジかよ、キュルケが俺に惚れてるってなんでだ？
そんな要素はどこにもないだろう。
何故にそんな事になってんだ？
まぁ、俺としては嬉しいけど、今一理解出来んぞ……謎だ。

「うふふ、よかったわねキュルケ、さぁ、今日はお祝いにしなければね♪」
「ああ、娘の門出だ、祝わない訳がないな！　おい、宴の準備だ！」
「はっ畏まりました、旦那様」

なんか、宴会モードに突入してんだけど……
いいのか、これ、マジでこのまま進んでしまって。
なんだか、抜け出せない沼地に足を踏み入れたというか、蛇に絡み取られたというか……

そこはかとなく不安だ。

「アキテーヌ様……」
「あ、ああ……」
「これから、末永くよろしくお願いします♪」
「……そう、だな、よろしく頼むわ、キュルケ嬢」
「いやですわ、これからは、キュルケとお呼び下さい♪」
「なら俺の事も、クラウスでいいぜ。様付けなんて、他人行儀だしな。」
「ええ、クラウス♪」

それから宴会に突入してしまい、結局解放されたのは二日後だった。

ユウ達、心配してなきゃいいけどなぁ。
それにしても、これからキュルケと婚約者同士かぁ。
まさか、本当になるとは思わなかったぜ。
まぁ、嬉しいし、後はティファニアとマチルダを保護できれば完璧だな。
うっし、これからも気合入れていくか！
目指せ、俺の順風満帆生活！

陰謀をぶっ潰せ！（後書き）

マジで難産でした。何度書き直したかわかりません。いやはや、こういった話というのは難しいものですねぇ。痛感いたしました。法律についても結構悩みましたし、キュルケの件については五回位は書き直しました。ほんと、難しい……

なお、まだキュルケと一緒に暮らす事はありません。色々と準備もありますのでね。何れテファとマチルダも出しますが、もう数話先になります。

ではまた次回お会いしましょうノシ

基地完成！（前書き）

漸く基地完成までかけました。兵器などについては次回以降に回します。
あまりにも文章が長くなりすぎるので。

基地完成！

あのクズ野郎と文字通りの意味でぶっ潰してから、早二週間が経過した。
キュルケは来年から魔法学院へ入る為、色々準備があるらしくツェルプストー領へ戻った。
本来なら、こっちに来たかったらしいのだが、こればっかりはしゃーねぇわな。
エリーゼさんも、娘の婚姻支度があるという事で領地に戻ったよ。
随分と張り切っていたがな。

ちなみに俺は魔法学院へは入らない。
なんせ魔法全部スクウェアだし、今更習う事もねぇ訳よ。
生来口が悪いからな、今更貴族としてのたしなみなんぞ習っても身に付く訳がねぇしな。
その事を伝えたら、随分と寂しそうにしてたな。
悪いとは思うが領地の事もあるし、実際問題んな事してる余裕がねぇんだよな。
まぁ、長期の休みの時はこっちへ遊びに来いと言ってあるし、可能なら俺から会いに行くとも言っておいた。

んで、ゲイズさんは中央に残っているみてぇだな。
なんでも、あのクズの財産の没収やらなんやらでやらなきゃならない事が出来たらしい。
俺も手伝いを申し出たのだが、今のところ必要ないそうだ。
まぁ、何かあれば呼んでくれと伝えてあるので大丈夫だろうさ。

「クリエイター、ご報告です」
「おう」

「基地の完成度は現在九十八パーセント、最終的な微調整も含め後二日ほどで完成いたします」

「そうか、わかった」

「なお、基地全体の内、約三十五パーセントほどが空きとなっております」

「んなに空いてるのか……わぁった、空きについては何かしら考えておく。お前らはそのまま作業を続行しろ。」

「了解」

いよいよ基地が完成するか。

完成したら、速攻で軍事力の作製を開始するか。

後あれだな、法律の方も発布しなけりゃならねぇな。

そうそう、法律で思い出したけど、戸籍も作っておかないといけねぇよな。

せっかく身分証明を作るんだからな、税金なんかの管理の為にも戸籍作製は必須だな。

「クラウス様」

「おう、どうしたい」

「お茶をお持ちいたしました」

「おう、あんがとよ」

ズズズ……

「いや〜アイも茶入れるの上手くなったじゃねぇか」

「ありがとうございます♪」

「最初はずっこけてばっかだったのになぁ、ははは」
「も、もう、言わないで下さい……」
「悪りぃ悪りぃ♪」

アイも他の二人と同様大分明るくなったな。
まぁ、時折すっとぼけた事してるみたいだが、それも愛嬌といったところかね。
ユウもレイも大分明るくなってきたし、いい事だぜ。

……
……
……

そうして、領内の細々した事を片付けていたらあっという間に二日が経過した。
いよいよ本日は基地が完成する日だ。
いや～待ちに待った日が漸くやってきたな！
俄然気合が入るぜ！

ブゥン……

「どうだ、基地は完成したか」
「予定通りに完成いたしました」
「そうか、では今からそっち行くぞ」
「了解」

うう～ん、どんな感じに仕上がっているか楽しみだぜぇ！
とりあえず、内部の視察が済んだらWシリーズを量産しつつ機動兵器の作製といこう。
それが終わったら戦艦だな。

領内警備用の奴とかも創らなきゃならねぇし、いやはや忙しいねぃ♪
うっし、さっさと行くか！

……
…………

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼海底地下秘密基地▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

うおおお！
す、すげぇぜこりゃ！
予想以上にすげぇ！
これだけの広さと設備がありゃ、なんだって出来るじゃねぇかよ！
Wシリーズは存外に優秀だな。

と、感動してる場合じゃねぇな。
先ずはここと館にある俺の部屋を繋ぐテレポーターを設置するかね。
設置が終わったら、今度はWシリーズ達が地上へ移動する為の大型テレポーターの設置だな。

「んじゃ、先ずは俺個人のテレポーターから探すか。知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）！」
え〜と、テレポーターに関する技術はと……あったあった。
へ〜随分と色々あんだな。
創るならやっぱセキュリティ性の高いのがいいな。
間違って誰かが作動させたら不味いからな。

「う〜ん……お、俺個人用のはこれがよさそうだな。指紋、声紋、網膜パターン、手動入力パスワード付きだから、まず間違いなく誰

かが勝手に作動させる事はねぇだろう。うっし、んじゃ次は設計図だな、機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）！」

お、あったあった。

やっぱりテレポーターとなると、結構複雑だな。

いろんなゲームとかでも、割と転送技術って難しい場合が多いからな。

慎重に創らなねば！

「それじゃ創るか、創造（クリエイト）！！」

ポクポクポク……チーン！！

ふう、なんとか出来たか。

「と、そうだった、座標調べないとな」

座標の確認はテレポーターの機能で出来たはずだな。

え～とと……ふむ、これを館側のテレポーターに入力してやればいいんだな。

んで、館側のテレポーターの座標をこっちに入力すればいいと。

あっと、忘れてた、管理者登録しとかないとな。

これやっとかないと、座標登録しても使えねぇからな。

登録中……

これで完了と。

んじゃ、館の方へ戻って作業を続けるとするか。

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼館：私室▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

設置場所は、この間改装して作っておいた隠し部屋に設置しよう。
あそこなら、勝手に入ってこられる事はほぼないだろうからな。
うっし、それじゃ仕掛けを動かすかね。

「よいしょっと！」

ガコン……ゴゴゴゴ……

広さ的にも問題ないな、計算通りだぜ。
それじゃ、テレポーターを設置するかね。

「んだば、創造（クリエイト）！」

ポクポクポク……

……チーン！！

うっし、設置完了！

「え～と、それじゃ座標を確認してと……ふむふむなるほどね。んじゃ次は管理者の登録だな。」

登録中……

「うし、管理者登録は終わり、次は基地側のテレポーターの座標設

定だな。え～とと……」

座標登録中……

「おっし、後は基地側のテレポーターにここの座標を登録すれば完了だな！」

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼海底地下秘密基地▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「んじゃま、座標を登録してっと……」

座標登録中……

「おっしゃ、完成だ！」

ふう、なかなか手間のかかる作業だったな。

いくら俺が虚無魔法である、瞬間移動（テレポート）を使えるとしても辛いものだ。

まぁ、瞬間移動（テレポート）あるから俺個人としては、テレポーターって本来要らないんだが、今後はキュルケもいるし、何れはティファニアやマチルダも増えるしな。

それに何よりもやっぱり秘密基地である以上、魔法でポンと移動ってな浪漫が無い！！！

こういった細かいところにこそ、漢は浪漫を求めるものだぜぃ！

「それじゃ早速テストといくか！」

え～と、セキュリティを解除してっと……んで、転送先の座標を選らんで……おし！

「それじゃ、ポチっとな！」

シュン！

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼海底秘密基地テレポーター▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

うほ、本当に一瞬で着いたぜ！

バッチリ成功だな！

んでは、この勢いでWシリーズ用の大型テレポーターも一気に設置すっか！

設置作業中……

設置作業中……

設置作業中……

設置作業中……

設置作業中……

うひ～一人でやると、やっぱり手間かかるなぁ。

こっちは出口にステルス迷彩組み込まなきゃならないから、余計に時間食ったなぁ。

何れは領内の各所にテレポーターを増やして、Wシリーズの展開を迅速に行えるようにしなければな。

そうすりゃ有事の際も、まごつく事は無いだろうからな！

とりあえずテレポーターは設置出来たから、次は……あ、そうだ、ユウ達に通信機渡しておこう。
じゃねぇと、俺がこっちにいる時連絡が取れなくなっちまうからな。
通信機はユウ達専用にしよう。
ついでに、小型軽量、なおかつシンプルな設計のやつにしとくべきだな。
それから、ユウ達にスタンガン持たせておくか。
あくまで自衛用にという事で、致死量にはならないようなやつにしとこう。

「え～と、それじゃ先ずは通信機からだな、知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）！」

え～と、小型軽量でシンプルなやつはっと……お、これがよさそうだな。
見た目が指輪型だから、女性が付けてても怪しまれないし、ＤＮＡ登録をすれば専用にもなるようだしな。
それにどうやら通信相手を登録出来るみたいだから、先に俺の通信機のＩＤを登録しときゃボタンを押せば通信できるな。
これなら機械に慣れていない三人でも十分に使えるな。
うっし、これにしよう。

「ほんじゃお次は、機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）！」

え～と設計図はと……うし、これだ。

「んじゃ創りますか、創造（クリエイト）！」

ポクポクポク……チーン！！

うっし、三人分出来たっと。
んじゃ、三人に渡しにいくかな。

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼館▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

え～と、ユウ達はどこかいなっと……お、いたいた。

「お～い」
「クラウス様、いかがなさいました？」
「ちと三人に渡す物があってな」
「私達(わたくし)にでございますか？」
「ああ」

そうして三人に通信機の説明をしたんだが、まぁ、やっぱり機械に慣れていないせいか理解が追いつかないようだな。
まぁ、とことんシンプルなやつ選んだから使う分には問題ないと思うんだけど。

「んじゃ、これでお前達からも俺宛に通信が送れるからな。んじゃテストって事で、俺は私室にいるから通信送ってみてくれや。」

「はい、畏まりました」

……

「さて、ちゃんと通信出来るかね」

ピピッ！

「お、来たな」

カチッ……ブゥン……

『クラウス様、聞こえますでしょうか？』
『おう、ばっちり聞こえるぜ。ちゃんと使えたみてぇだな♪』
『はい♪』
『んじゃ、レイとアイも引き続きテストさせてくれ』
『畏まりました』

その後、レイとアイも通信を成功させたので、これにて通信関係は完了っと。
あ、一応人前ではあんまり使わないように注意しておいたぜ。
なんせ傍目からは、指輪に話しかけているようなもんだからな。
まぁ、機械だからディテクトマジックに反応する事もないし、問題は無いと思うが念の為にも注意しておかないとな。

あ、そうだ、この指輪キュルケにも渡しておいた方がいいな。
何かの時に役に立つだろうし。
なら、手紙出して、首都で会う約束取り付けておくか。
瞬間移動（テレポート）で行ってもいいんだけど、色々と説明が面倒だしな。

……

うっし、んじゃこれを届けて貰うとしますかね。
一応鷹便用の鷹は用意してあるからな。
まぁ、あんま使わないと思うけどさ。

「レイ、この手紙出しておいてくれるか」
「あ、はい、わかりました」
「頼んだぜ」

……

……

これでキュルケの方はよしっと。
て、もう外も真っ暗だな。
今日はここらで切り上げて休むとするか。
機動兵器とかWシリーズの増産は明日以降にするとしよう。
ああ、明日からも忙しいけど楽しみな日々だぜ！

基地完成！（後書き）

今回はメイド三人娘にも通信機を配布。まぁ、実際無いとかなり不便だと思いましたので、早めに渡しました。
ちなみに彼女達は、主人公は不思議な方～位に思っているのであんまり驚きません。
実際のところ、ハルケギニアの平民だと教養とかって無いに等しいですからね。

次回はWシリーズの増産と機動兵器の生産です。
キュルケの事については、次の次くらいに書きたいと思います。
せっかくのデートですし……リア充爆発しろ……

では、次回またよろしくお願いしやっす！

キュルケとのデート……そのとき……（前書き）

や、やっと書きあがりました。デート部分はすぐ終わったんですけど、後半がなかなか纏まらず……とりあえず、どうぞです。

キュルケとのデート……そのとき……

基地の完成から一週間ほど経過したが、今のところさしたる問題もなく正常に機能しているようだ。

とはいえ、後々になって気が付いたのだが、これから作る予定の機動兵器の数が千を越えてしまうので今のままだと入りきらないんだよな。

だもんで、一応俺の能力の一つである、『空間操作能力（スペースオペレーション）』を使い、発信用ドッグと格納庫は空間を広げておいたぜ。

しかし、空間操作能力（スペースオペレーション）を始めて使ってはみたが結構便利な能力だ。なんせ、イメージするだけで空間を広げたり圧縮したり出来るからな。

しかもそこにある建造物とか一切被害でないという……まさにチートだぜ。

んで、本来なら早速機動兵器の作製に取り掛かりたいのだが、キュルケと首都で会う約束をしているので今現在は首都に来ている。

しっかしいつ来ても汚ねぇ場所だよなぁ、よくこんなとこで生活出来るわ……

表通りはまだしも、少し路地に入ればそこら中に汚物が散乱してんだもんよ。

衛生環境は最悪だな……俺の領地でも気をつけておかねぇと何時汚物にまみれるか……消毒用に火炎放射器でも作っておくべきか？

「と、着いた着いたっと……」

待ち合わせ場所はツェルプストー家の別宅にしておいた。
下手な所で待ち合わせなんぞして、妙な奴に絡まれたら面倒だからな。
まぁ、喧嘩売られたら買うけどよ。
「すいやせ～ん、クラウスだけど、キュルケいますか～！」
「おお、これはこれはクラウス様」
「おう、執事の爺さんか、すまねぇけどキュルケいるかい？」
「ええ、先ほどからお待ちですぞ、ささ、こちらへ」
約束の時間までにはまだ結構あんだけどな。
待たせても悪いし、さっさと行くか。
……
…………
▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼キュルケ私室▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼
「よう、キュルケ」
「いらっしゃい、クラウス、待ってたわよ♪」
「すまねぇな、態々呼び出してよ」
「いいのよ、でもどうしたのかしら？」
「ああ、ちと渡す物があってな」
「渡す物」
「ああ、これだ」
そうして、キュルケに指輪型通信機を渡した。
これはユウ達に渡した物よりも高性能な代物だ。
なんせ、通信距離が地球半周分もあるし映像の送受信も可能だ。
そのうえ、緊急時にはフィールドまで形成できるというある意味

では超チートな装備なのだ！
勿論、これと同じ物を何れはティファニアやマチルダにも渡す予定だ。
ユウ達のは、そこまで通信距離は必要じゃないからな。
まぁ、何れフィールド形成能力は付けるつもりだがね。

「指輪ね……素敵な色♪」

「まぁ、多少はデザイン凝ったからな。でもな、見た目は指輪だけどただの指輪じゃねぇんだわ。」

「どういう事？」

キュルケの通信機の使い方を講義した訳だが……やっぱりハルケギニア人は機械技術には慣れていないからなかなか使いこなせない感じだ。

まぁ、それもしょうがねぇよな。
なんせ、この通信機、地球でもかなり先の時代の技術だしな。
今まで機械に触った事ない人間じゃ、理解出来ないのも無理はねぇやな。
根気良く教えるしかあるめぇな。

……
……

講義開始から二時間ほどして、漸く使い方が理解出来始めたようだ。
とはいえ、まだおぼつかない感じではあるが、まぁ、大丈夫だろう。

んじゃ、早速テストしてみますかね。

「んじゃ、テストしてみるぞ、俺が隣の部屋に行くから二分後に通信送ってみてくれや」

「え、ええ、わかったわ」

……

「さて、そろそろくるかね」

ブゥン……

『お、きたな、ちゃんと出来たみてぇだな』

『ほ、本当に顔も見えるし声も聞こえるのね……』

『ああ、ちなみに、ツェルプストー領から通信しても俺の領地まで余裕で届くぞ』

『……凄いわねぇ、こんな物一体どこで？』

『ああ、俺が作った』

『え？！』

『人には教えるなよ？　面倒だからな』

『それはわかってるけど……』

『とりあえず、部屋戻るな』

『ええ』

まぁ、驚いてるわな。

なんせ、ハルケギニアには存在しない技術だからなぁ。

これであの基地を見たら腰抜かすんじゃねぇのかね。

……

「とまぁ、こういう訳で、そいつを渡すために今日は呼び出した訳だ」
「そうだったのね……」
「人に知られると面倒だからな」
「というより異端審問に掛けられるわよ？」
「別にロマリアのクソ坊主共なんぞ眼中にねぇよ」
「……本気で言ってるの？」
「勿論本気だ、喧嘩売られたら買うぜ」
「……ハルケギニアの人間じゃ考えられないわね」
「まぁ、そうだろうな、でも俺東方出身だしな、ブリミルなんぞどうでもいいからよ」
「……それ、絶対人前でいっちゃ駄目よ」
「わぁってるよ、自分から火の粉飛ばす真似はしねぇって」
「ならいいけど……」

どの道奴ら程度の頭じゃ理解も出来ないし、分解も出来ないからな。
魔法使ってないからディテクトマジックにも反応しねぇし、どうとでもなるわ。
まぁ、喧嘩売ってきたら買ってやるがな。

「でもクラウスってほんと凄いわね」
「別にそうでもねぇって」
「もう、照れなくてもいいのに♪」
「照れてねぇよ……」
「もう、案外可愛いのね♪」
「十六の漢に可愛いはねぇだろ……」
「ふふ、そういうところが可愛いの♪」

う～む、なんだか遊ばれてる気がしないでもないな。

世の男共は、みんなこうなのかねぇ。
まぁ、キュルケは女としては既に一端のもんだからなぁ。
男の扱いも心得てんのかね。

「そりゃそうとよ、せっかく時間あんだし少しでかけっか？」
「あら、デートのお誘いかしら♪」
「ま、そんなとこだ」
「ふふ、嬉しい♪」

ギュ……

「……あんまひっつくなよ」
「ふふ、いいじゃない、婚約者なんだし♪」
「そらそうなんだがよ」
「もう、ほんと可愛い♪」

やべぇな、こりゃ俺も将来は尻に敷かれるなぁ……
まぁ、あれだ、世の中女房が強い方が上手くいくらしいからなぁ。
ツェルプストーの女はその点滅茶苦茶強そうだからな、当分は逆らえそうもねぇやな……

「キュルケには勝てそうもねぇな」
「当然よ、ツェルプストーの女は強いわ♪」
「……あんとき大泣きしたのは誰だったっけな♪」
「も、もう、それを言わないでよ……」
「ははは、悪ぃ悪ぃ。んじゃ、でかけっとすっかね。」
「あ、その前に着替えるわ」
「あいよ、んじゃ広間で待ってるわ」
「ええ♪」

そこらぶらつくだけなんだから、別にお色直しなんぞしなくてもいいだろうに。
やっぱ女の行動ってな、いまいちよくわからんわ。
この辺、俺もまだまだガキだよなぁ。

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼広間▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「お邪魔するぜっと……およ、ゲイズさんにエリーゼさん」
「ああ、クラウス殿か」
「ごきげんよう、クラウス殿」
「ああ、つかよ、義理の息子に殿はいらねぇだろ、呼び捨てでいいって」
「それもそうだな」
「そうですわね♪」
「つかよ、今日はどうしたんだい？」
「先のゲーヴィッツの件で少々な」
「あの玉無しか、そういやあのクソ野郎はどうなったんだ？」
「なんでも、公金横領やその他諸々の罪があるようでな、極刑が決まったそうだ」
「そうかいそうかい、ざまぁねぇやな」
「全くだ」

あのクソ野郎は死刑か……ま、当然だわな。
にしても、公金横領とかよくやるわ。
んなのハルケギニアじゃすぐバレるだろうになぁ。
やっぱ頭の中身腐ってたんだな。

「それはそうと、クラウスさん」
「何だい、エリーゼさんよ」
「今日はキュルケとお出かけかしら？」
「ああ、ちと渡す物があって来たんだけどな、せっかくだしよ、その辺ぶらついて来ようかとな」
「そうですか、キュルケの事頼みますね」
「あいよ」

まぁ、そこらぶらつくだけだし別段危険も無いだろう。
とはいえ、何が起こるかわからねぇからな、油断しないようにしねぇと。
なんせここは、一種の吹き溜まりみたいなもんだからなぁ。

「お待たせ、クラウス」
「おう、そんじゃ行くか」
「ええ、お父様、お母様、行って参りますわ♪」
「ああ、楽しんでくるといい」
「頑張るのですよ♪」
「ええ、お母様♪」

何を頑張れってんだよ……まだ子作りするつもりはねぇぞ。
何れはするだろうけど、俺もキュルケもまだガキだしな。
子供作るなんざ、千年はえぇやな。

……
……

▼▼▼▼▼▼▼▼首都：街▼▼▼▼▼▼▼▼▼

街に出てからは、適当にぶらついて店を梯子したりしてんだけど

……やっぱ女の買い物はなげぇ……

つか、なんで服選ぶだけであんなに時間かかんだよ。
服なんて動きやすけりゃなんでもいいと思うんだがなぁ。

「ねぇ、クラウス、ちょっと聞きたい事があるんだけど」
「あん？」
「前に言ってた片思いの人って……」
「ああ、それな」
「その、今でも片思いしてるの？」
「まぁ、そうだな、なんつーのか好きってよりか助けたいって感じだな」
「助けたい？」

「ああ、詳しくは言えねぇけどよ、その二人もある意味じゃ犠牲者なんだわ。だからよ、なんとか助けてやりてぇんだわ。」

「そうなの……」
「まぁ、惚れてる部分もあんだけどよ」
「……私とどっちが好き？」

「正直な話すりゃよ、誰が一番なんて俺にゃどうでもいいんだ。全員同じように好きだしよ。」

「……ずるいわよ、そんな言い方されたら」
「悪ぃ」

キュルケと婚約している以上は、ティファニアやマチルダへの想いは断ち切らなきゃならねぇんだろうけど……

わかっちゃいるけど、どうしてもあの二人を忘れるなんて出来そうもねぇんだよな。
我ながら情けねぇこった。

「ねぇ、もしもよ、その二人を助けてその二人がクラウスを好きだって言ったら？」
「まぁ、受け入れるな。キュルケも含めて三人纏めて全員嫁にするさ。」
「はぁ……言っても聞かないみたいね」
「すまねぇな、どうしてもあの二人を嫌いになる事は出来そうもねぇんだわ」

「しょうがないか……元々貴方はその二人の事も好きだったんだし、私が少し先に出会っただけだものね」

駄目だねぇ俺も……一人に絞れないなんてよ。
でもなぁ、マジでキュルケとティファニアとマチルダには俺はぞっこん惚れてるからなぁ。
誰かに渡すなんてしたかねぇんだよな。

「悪ぃな……でもよ、二人に先に出会ってたとしても、俺はキュルケを好きなままだろうぜ」
「もう、調子いいんだから……」

「まぁ、あれだ俺はキュルケとその二人に対してぞっこん惚れてるんだわ。誰かに渡したくねぇのよ。」

「欲張りな人ね」
「違げぇねぇやな」

確かに欲張りだな。
キュルケに加えてあの二人なんてよ。
世の男共が羨むわな。

「しょうがないわね、認めてあげる。でも、三人共ちゃんと平等に愛してよ？」
「言われるまでもねぇ、漢の誇りにかけて三人纏めて幸せにすらぁ！」
「その言葉、忘れないでね♪」
「おうよ！！　しっかりかっきり、三人纏めてハルケギニアで最高に幸せにしてみせらぁ！」

ティファニアとマチルダに関しては、嫁にするうんぬん抜きにしても領地に連れて行くつもりなのだがな。

なんせ、アルビオンは内乱始まる可能性がある以上、被害を受けないとも限らん。
それにこのまま放置してたら、マチルダは何れ投獄され、最終的には生死不明状態になっちまう。
ルイズや才人に勲章やる為に、マチルダを犠牲にする必要性は皆無だしよ。
まぁ、俺がいる時点で歴史なんぞ当の昔に狂いまくってるからな、今更自重する必要はねぇだろうさ。
領地に戻ったらとりあえず飛行型の機動兵器作ってティファニア迎えに行くとすっかね。
マチルダに関しても既に手は打ってあるしな。
上手くいけば二人纏めて連れていけるだろうさ。

……

……

その後は二人で街をブラブラしていたんだが、やっぱあれだな、女の買い物っつーのは長げぇな。
あんで服一着選ぶのにああも時間かかるかね。
俺にゃわかんねぇやな。

「ほんじゃ日も暮れてきたし、そろそろ戻るか」
「そうね、楽しかったわ♪」
「ああ、俺もだ、久々にのんびりしたわ」

ドサッ……

「ん？」
「今何か音しなかったかしら？」
「ああ、こっちだな」

そうして路地裏に入ってみると……子供が倒れている。
なんだよ、ボロボロじゃねぇか！
直ぐに手当てしねぇと！

「おい嬢ちゃん、しっかりしな！」
「……」
「い、生きてるの？」
「ああ、一先ず呼吸はしてっから生きてはいるが、怪我が酷でぇな」
「なら連れて帰って治療しましょ」
「ああ」

やべぇな、体も冷え切ってやがる。
こりゃ急いで治療しねぇと！

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼別宅▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「これはキュルケお嬢様、クラウス様お帰りなさいませ」

「爺さん、すまねぇけど直ぐに治療用の道具用意してくれっか？」

「いかがなされましたか？」

「街で大怪我してるガキ拾ってよ、やばそうだから急いで治療しねぇといけねぇんだわ」

「左様でございましたか、では直ぐにでも用意いたします」

「ああ、頼むぜ」

一体どうしてこの嬢ちゃんはこんな大怪我こさえたんだ……

どうみても転んで付く様な傷じゃねぇしな。

誰かにやられたとしか考えられねぇ……

となると、可能性としちゃ奴隷として扱われてて逃げ出したか何かやらかしたか……もしくはどこぞのバカ貴族が腹いせにでも殴ったか？

どちらにしろ許せるこっちゃねぇな……

まぁ、事故とかだったらしゃーねぇかもしれんけどよ、それでも手当てせずにそのままってのはあり得ねぇしなぁ。

手当てが終わったちと聞いてみっか。

手当て中……

手当て中……

「とりあえずこれでよしっと……」
「ねぇ、この子なんだけど……」
「どしたよ、キュルケ」
「耳を見て……」
「耳？」

あれまぁ、ピコピコ動いて可愛い耳だこと……て、和んでる場合じゃねぇ！
この耳は！

「これ、あれだよな」
「ええ……」
「髪で隠れててわからんかったけど、この嬢ちゃんエルフか」
「そう、みたいね……」

「はぁ……だからこんな怪我してたんか、どうせエルフだからって迫害されたとかって落ちだろう……下らねぇ」

こりゃこのまま外にほっぽり出す訳にはいかねぇわな。
俺の領地に連れて帰るしかねぇか。
まぁ、俺の領地ならエルフだろうがなんだろうがお構いなしだからな。
つか、その程度の事で迫害するなんて真似する奴ぁ俺がぶちのめすからな。

「……うぅ」
「お、目覚めたか」
「ク、クラウス、危ないわよ……」
「でぇじょぶだって、こんなガキんちょに何もできゃしねぇよ」

さてと、とりあえず可能な限り明るく振舞うとするか。
ビビらせてもしゃーねぇしな。

「嬢ちゃん、俺の顔見えっか？」
「……お、お兄、ちゃん……誰？」
「ああ、俺はクラウスってんだ、嬢ちゃん名前は？」
「……ヘレナ」
「ほ～可愛い名前じゃねぇか♪」

ナデナデ……

「……あぅ、い、苛めないで……」

頭なでただけでこの反応か……こりゃ随分酷い目にあってきたんだな。
可愛そうにょぅ……泣けてくるぜ。
まずはしっかりと安心させてやらねぇと。

「ああ、安心しな、俺は嬢ちゃんを苛めるような真似はしねぇからよ♪」
「……」
「それはそうとよ、ヘレナはどっから来たんだ？　お父さんとお母さんはいねぇのか？」
「……遠いとこ……パパとママは……動かなくなっちゃったの……」
「そっか……」

この嬢ちゃんの両親はやっぱ死んでる訳か……こりゃ益々放っては置けねぇわな。
とりあえず本人の意思を確認して、問題無いようなら連れて帰る

か。
ガキ一人増えたところで、全く問題ねぇしな。
「嬢ちゃん、家あんのか？」
「……フルフル」
「そっか、なら俺んとこ来るか？」
「……え？」
「ク、クラウス？！」
「俺んとこならよ、誰も嬢ちゃん苛めたりしねぇしよ、何より俺がいっからな♪」
「……お、お兄、ちゃん……へレナの事、苛めない？」
「苛める訳ねぇだろうよ、ガキ泣かすなんて漢の腐った真似は兄ちゃんは絶対にしねぇぞ♪」
「ちょっと！　本気で言ってるの、クラウス？！」
「当たり前だろう、大体なんでそんなビクついてんだよ？」
「だ、だってエルフよ？」
「だからどうしたってんだよ、たかが耳がちょっと長ぇだけじゃねぇか。別に人間と変わりゃしねぇよ。なぁ、へレナ♪」
「……ほ、本当に苛めない？」
「おう、安心しな。しっかりと兄ちゃんが守ってやっからよ。」
ナデナデ……
「……ふぇ！」
「今まで随分辛い目にあってきたんだろうけど、兄ちゃんがいる限りはもう大丈夫だからな。だからよ、好きなだけ泣きな。」

「……うぇ……ぐすっ……うぇぇぇぇ……あああぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

それから十分近く、嬢ちゃんの慟哭は続いた。
泣き叫んでる間、両親と思しき者の名前をしきりに叫んでいたな。
はぁ、ガキの泣き声ってな何時聞いても堪えるもんだな。
もう二度とこの嬢ちゃん泣かさねぇように、しっかり守ってやんなきゃな。

……

「……すぅ……すぅ……」
「ありゃま、寝ちまったか……はは、随分可愛い寝顔じゃねぇか」
「……ねぇ、クラウス、本気でその子引き取るつもりなの？」
「当然！」
「で、でもエルフなのよ、もしエルフを匿ってるなんて知れたら……」
「まぁ、ロマリアのクソ坊主共なんかは黙ってねぇだろうな」
「わ、わかってるなら！」
「ロマリアのクソ坊主共がなんだってんだよ、俺にゃ関係ねぇな」
「だって、下手したら異端審問よ?!」
「上等じゃねぇか、喧嘩売るなら買ってやらぁ！」

ヘレナが純粋なエルフかどうかはわからねぇけど、エルフの血引いてるってわかりゃあのクソ坊主共は黙ってねぇだろう。
ほぼ確実に俺の領地に乗り込んできて、ヘレナの引渡しか俺への異端審問を開くだろうよ。
だが、それがどうしたってんだよ。
奴らが喧嘩売ってくるなら、最悪あの国ごと滅ぼすまでよ。

どの道、何れはきっちりと片ぁつけなきゃならねぇんだしな。

「で、でも、ブリミル教と敵対するなんて！」

「元々俺はブリミルなんて信じちゃいねぇからな、あんなクソ教団どうでもいいんだよ」

「そんな理屈通用する相手じゃないわよ！」

「わぁってるよ、んなこたぁ。けどよ、何時までも奴らにビクついてる必要はねぇだろ。」

「そ、それはそうだけど……」

「俺に言わせりゃな、ハルケギニア人は勝手にエルフを恐れて、勝手に迫害してるだけだ。エルフだってちゃんと話が出来て心もあるんだ。外見や能力で偏見持つのはいけねぇことだと俺は思うぜ。」

「そうは言っても……」

まぁあれだな、ハルケギニア人として生まれ育った以上はそう簡単にはいかねぇわな。

だがそうやって偏見や差別を続けてりゃ、何時かは取り返しの付かねぇ事になっちまうんだ。

だからこそ、俺にとって今時点で一番身近な存在であろうキュルケの意識から改革していかねぇとな。

何れはハルケギニア中で、そういうバカげた考えがなくなりゃいいんだけどよ。

「まぁキュルケもハルケギニアで生まれ育ったからしゃーねぇとは思う。でもよ、出来る限りでいいんだ、見た目で人を判断するような真似はしねぇでくれや。相手も同じ大地に生きてる隣人なんだからよ、んな下らねぇ事で喧嘩しててもしゃーねぇだろう？」

「……」
「それにだ、キュルケにはヘレナが危険人物に見えるか？」
「そ、それは……見えないわね……」
「エルフつったって、子供は変わりゃしねぇんだよ」
「……」
「だからよ、今すぐ全部は無理でもヘレナにだけは辛く当たらねぇでやってくれや」

ブリミル教なんてクソったれな宗教が蔓延してるハルケギニアじゃなかなか難しいだろうな。
それに、貴族社会ってな相手見下してなんぼって感じだからなぁ、そんな世界で生まれ育ったキュルケには、ちぃとばかし難しいかもな。

それでもよ、やっぱキュルケにはそんなクソったれな慣習になんぞ囚われて欲しくはねぇんだよな。
もっと視野を広げて、いろんな物の見方をして貰いてぇ。
そうすりゃよ、今よりもっといい人間になれらぁ。

「俺もよ、今すぐ考え改めろなんて無茶は言わねぇよ。ただ、そのための努力は怠らねぇでくれや。」
「……わかったわ、私も頑張ってみるわ」
「あんがとよ、すまねぇな無茶ばかり言っちまってよ」
「いいのよ、確かにクラウスの言うとおりだもの」

「俺の考えが全て正しいって訳じゃねぇさ。でもよ、今のブリミル教の教えや考えは人として間違ってると思う訳よ。俺らは貴族である前に『人間』なんだしな。」

「クラウスはほんと凄いわね、そんな考えが出来るなんて」

「別に難しいこっちゃねぇさ。ただ、人間として何が大事かを考えりゃ誰でも思いつく事だ。」

俺も別に偉そうなこたぁ言えねぇけどよ、やっぱ人間として捨てちゃならねぇ仁義ってもんがあるよな。

それを考えりゃ、今のハルケギニアがどんだけクソの掃き溜めのような世界かわかるってもんよ。

世界を変えるなんてこたぁ、今すぐに出来るこっちゃねぇし、俺がどんだけ力を持ってるとしても人の心までは操れねぇ以上、途方もねぇ時間がかかるだろう。

それでも、何時かは変えていかなきゃならねぇんだよな。

この世界のためにもよ。

ギュ……

「て、およ？」

「……パパ……ママァ……」

「両親の夢見てんのか……」

「……そうみたいね」

なんつーのか、ヘレナの泣きそうな顔みてっと胸が苦しくなってくるな……ガキは笑ってるのが一番いいぜ。

大人のクソみてぇな欲望や考えに、ガキが犠牲になるなんざ俺には耐えられそうもねぇな。

やっぱな、ガキってのは万国共通で御国の宝よ。

人種なんぞにこだわらず、大人は子供をしっかり守るべきなんだよ。

ヘレナも今まで散々辛い思いをしてきたんだからな、ここらで幸

せになるべきだ。
それを邪魔しようとする奴がいるなら、俺が徹底的に潰してやるぜ。

「……でもほんと、クラウスに嫁ぐとなると大変そうね。やる事成す事全部常識から外れてるから。」

「まぁ、確かにハルケギニアの常識からすりゃそうだわな、悪ぃな結婚前から苦労かけちまってよ」

「ううん、いいのよ。それに苦労だなんて思ってないわ。」
「そうかい、あんがとよ」
「それにね、私はクラウスのそんなところも好きよ」
「よせやい、照れるじゃねぇか」
「ふふ」

全くキュルケはよく出来た女房だ。
俺なんかにゃ勿体ねぇくらいだぜ。
やっぱ俺って果報者だよな。

「ねぇクラウス」
「ん？」

「さっきのクラウスの話を聞いて私決めたわ。今までみたいにただ生きてるだけじゃなくて、もっと自分の考えをもって生きると。今までの私は結局『ツェルプストー家の娘』として生きてただけなのよね。『キュルケ』として生きてたわけじゃないのよ。だからこれからはもっと私自身を磨き上げて、自分自身の行動に責任を持てるようにするわ。」

「立派な志だと思うぜ」
「クラウスの妻だものね、それくらい出来なきゃ恥ずかしいじゃない♪」

やれやれ、本当に凄ぇな。
普通その年でそんな考え出来ねぇよ。
俺も負けてられねぇわな。

「んじゃよ、先ずはヘレナを怖がらねぇようにな♪」
「わかってるわ。でも、こうして見るとほんと、可愛い寝顔ね」
「だろ？」

ヘレナの可愛さは犯罪級だよなぁ、このちっこい手で必死に俺のマント掴んでくるとこなんざもう吐血するかと思ったぜ。

やっぱどこの漫画やゲームでもエルフって美人が多いから、ハルケギニアもティファニアにしろヘレナにしろ可愛さ半端ねぇな。

変な虫が付かねぇように気ぃつけねぇとな！

……
……

それからは、キュルケと二人してヘレナの寝顔を見ていた。
キュルケもヘレナの頬を突いたりしていて、随分萌えていたな。
だってよ、突く度にする反応がもう可愛くて可愛くて。
それに、マントを離すと必死に探してるのがまた可愛いんだわ。
やばい、俺マジで子煩悩になりそうだぜ。

「やばいな、この可愛さは犯罪級だぜ」

「ほんとね……なんだか怖がってたのがバカらしくなってくるわ」
「はは、そうだろうよ、エルフだからって化け物って訳じゃねぇんだよ」
「そうね、起きたら謝らなきゃね」
「大丈夫だろうよ、ちゃんと話せばわかってくれるさ」

あれだな、ハルケギニア人がエルフを恐れるのって、結局のところブリミルに端を発してるんだよな。
あのクソさえいなけりゃハルケギニアももう少しまともな世界だったろうに。
つか、アニメやＷｉｋｉ読んで思ってたけど、どうしてブリミルはエルフに喧嘩売ったんだ？
どうもその辺りにこの世界の歪みの原因がある気がしてならねぇんだよな。
まぁ、俺から言わせりゃブリミルなんざ、ハルケギニアを縛る呪縛でしかねぇからな。
奴の存在がある限り、ハルケギニアは発展出来ねぇ。
文明の進歩が止まっちゃ、人間は生きてる意味がねぇからなぁ。
なんとかして、ブリミルのクソったれの呪縛からハルケギニアを解放しねぇと。
そのためにも、早く戦力用意して何れブリミル教をぶっ潰さねぇといけねぇやな。
やれやれ、まだまだやることたぁ多そうだな。
とはいえ、今いるガキ共やこれから生まれてくるガキ共、そして俺の将来の女房の為にも頑張らねぇといけねぇな。

キュルケとのデート……そのとき……（後書き）

懲りずに出しました、オリキャラの『ヘレナ』です。設定年齢は……なんと、五歳！！！オリキャラにしては珍しい幼女です！（キリッ
出すかどうか迷ったのですが、キュルケの精神的成長を促す為にも出しました。
今後はクラウスの館で暮らす事になるので、ちょろちょろと出てくると思います。
まぁ、これもティファニアへの布石でもあるんですがね。

次回は漸く戦力の増産に移ります。
次回投稿後に、保有戦力やその他諸々の細かい設定を出します。

では！

機動兵器完成！（前書き）

今回は少々短いです。あんまりにも描写を長くすると半端じゃなく長くなりそうだったので、一機種のみ描写して後は軽く流しています。

これも話の都合という事でどうか一つ……

機動兵器完成！

あの後ヘレナが目を覚ました為、ゲイズさんとエリーゼさんに紹介したところやはりキュルケと同じような反応が返ってきた。

それもしゃあねぇとは思うんだけど、こんなチビ相手にんなビビら無くてもいいだろうに。

それでもやっぱりヘレナを見捨てるなんて俺には出来ねぇからな、必死で二人を説得したぜ。

まぁ、肉体言語使おうかとも思ったが一応は自重した。

んでまぁ色々と話てみたところ、ゲイズさんもエリーゼさんも納得はしてくれた。

というか、最終的には二人共ヘレナの可愛さにやられた感じなんだけどな。

なんせ、俺の後ろに隠れてちょろちょろと顔出して小首傾げてるのがもうよ、激烈に可愛いのなんのって！

ゲイズさんもエリーゼさんも最初は強張った顔してたが、次第に顔が崩れてきてもうあれだ、孫を可愛がる祖父と祖母だったな。

終いにゃ二人してヘレナを抱っこしてもうご満悦な顔だった。

とまぁ、そういう訳でヘレナの事は認められた。

勿論ロマリアのクソ坊主共にはバレない様にとのお達しが下された。

確かに面倒臭ぇと思うが、俺はヘレナを隠すつもりなんざさらさら無い。

様はエルフだとわからなければいいんだからな。
それにはあの特徴的な耳さえなんとかすりゃ、普通にしてたらまずわからん。
なので、領地に戻ったら基地の医療設備使ってヘレナの耳を整形するつもりだ。
本来親に貰った顔を弄るなんざいけねぇ事なんだろうけど、今回ばかりは背に腹は代えられん。
何れティファニアを助け出したら、同じように整形するつもりだ。
まぁ、それも本人にちゃんと説明して了承すればの話だがな。

んで、現在何をしているかというと、まだツェルプストー家の別宅にいるんだよな。
俺はそろそろ帰ろうと思うんだが、キュルケ達がなかなかヘレナを離さないもんで……
こりゃ完璧に堕ちたな……

「つか、いい加減ヘレナを離してやれよ……」
「だって、ヘレナ可愛いんですもの♪」
「うむ、なにやら孫娘が出来た気分だ」
「そうねぇ、ほらヘレナちゃん、いらっしゃい♪」
「やれやれ、最初はビビッてたのはどこの誰だったかねぇ♪」
「それはそれよ♪」

まぁ、この分ならティファニアを連れて来ても恐らく問題あるめぇな。
あれもヘレナに負けず劣らず可愛いからな。
キュルケは案外対抗意識燃やしそうだけどな、なんせあれの胸はすげぇからな。
漢にとっちゃ凶器以外の何者でもねぇぜ。

そうそうそれとだな、ヘレナを俺の娘にするって話だが本人に俺がパパになってやると言ったところ、まぁわんわん泣きになっちまってな。

やっぱ寂しかったんだろうなぁ……不憫なもんだぜ。

んで今じゃ俺の事は『クラウスパパ』、キュルケの事は『キュルケママ』だ。

いやはや、もうあれだな、絶対に嫁には出さん！！！

「しかし、どうするつもりなのだクラウス、私もああは言ったが秘密を隠し通すのはなかなか難しいぞ」

「ああ問題ねぇよ、ちゃんと秘策があっからな。見た目にはエルフだと絶対わからなくなるからよ」

「そんな方法がありますの？」

「俺だけが使える方法だ。簡単に言やよ、耳を整形するんだわ。」

「整形？」

「外科的医療で耳の形自体を変えるのさ」

「そ、そのような事が出来るのか？」

「ああ、俺の領地にはしっかり設備整えてあっからな。一切痛みもねぇしよ。」

「す、凄いですわね」

「まぁな。今のハルケギニアにゃ存在しねぇ技術だからよ。」

「……やれやれ、私はクラウスが恐ろしくなるよ。一体どこからそのような技術を。」

「それについては企業秘密だな、まぁ何れ俺の領地に来たときに見せてやるよ。ただ、誰にも言うなよ？」

「わかっている、というより誰も信じはしないだろうしな。それにロマリアの坊主共に聞かれたら面倒だ。」

「ま、そういうこったな」

何れは色々説明しないといけねぇやな。
まぁ、どの道バレたところでどうなるもんでもねぇんだけど。
さてと、それじゃそろそろ領地に戻るかね。
思いの外長居しちまったからなぁ。

「んじゃ、そろそろ戻るわ」
「そうね、あんまり領地を空ける訳にもいかないものね」
「ヘレナいくぞ」
「キュルケママは？」
「ごめんね、私は一緒には行けないのよ」
「ふぇ……」
「あ～泣くな泣くな、何時でも会えるからよ」
「……ぐすっ……でもぉ……」
「あ～ん、もう、そんな顔しないでヘレナ。私だって寂しいのよぅ。」

ありゃりゃまた始まっちまったよ……どうすっかねこれ。

……
……

それからえらい苦労してヘレナを宥め、なんとか領地への帰路に着いた。
とはいえ、虚無の曜日には必ず会いに行く事を約束されてたがな。
まぁ、ヘレナのためならしゃーねぇわな。

つっても、俺の能力とか使えばすぐいけるから別に問題ねぇんだけどな。
基地に関する説明とか終えたら、ツェルプストーの屋敷にもテレポーター設置しておかねぇとな。
それまでは自家用機で行くしかねぇか。

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼館▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「う～い、ただいま～と」
「お帰りなさいませ、クラウス様」
「おう、ユウただいま、留守中なんかあったか？」
「いえ、特には」
「そうかい。そりゃ何よりだ」

一日で帰るつもりだったのに、結局三日も長居しちまったからな。
その間に何もなくてよかったぜ。

「あ、あの、クラウス様」
「あん？」
「う、後ろの娘は……」
「ん？　ああ、道で拾ってな、ツェルプストー一家とも相談して俺の娘にした♪」
「……その娘、エルフ、ですわよね」
「まぁ気にするなって、別に取って食やしねぇよ」
「で、ですが……」
「大丈夫だって、ツェルプストー家の方も認めてるしな。それに、

キュルケもゲイズさんもエリーゼさんもえらい可愛がってるからよ。
」

「……クラウスパパぁ」
「ほら、隠れてねぇで挨拶しなって」
「……フルフル」

やっぱまだ人見知りは治らねぇか。
それもしゃーねぇわな。
ま、ゆっくり治していくしかあるめぇな。

「悪ぃなユウ、こいつ人見知りでよ」
「い、いえ……しかしよろしいのですか？　ロマリアの神官にでも見つかったら。」
「大丈夫大丈夫、その辺しっかり対策があっからよ」
「左様でございますか、それであれば安心ですね」
「ほれ、ヘレナも隠れてねぇでこっち来な。この姉ちゃんはヘレナを苛めたりしねぇからよ。」
「……ほ、本当？」
「ああ」

だから、そうやってスカートの裾を掴んでおずおず出てくるのやめれっつの！
萌えちまうだろうが！
全くもう、なんでこうエルフのガキってな可愛いんだよ。
将来美人確定だな！

……
……

それからユウ達とヘレナの自己紹介もなんとか終わり、ヘレナも多少はユウ達に心を開いたようだ。
まぁ、案の定ユウ達もヘレナの可愛さに堕とされたみてぇだけどな。
それも仕方あるめぇ、何せあの可愛さだから！
堕ちない奴なんざ、目ん玉腐ってるとしか思えねぇぜ！

……

……

さてと、漸く落ち着いた事だしいよいよ機動兵器の創造に取り掛かるとするか。
やっぱり先ずはあれだな、母艦が大事だよな。
母艦作り終えたら、先に俺が乗る機動兵器を作って、その次にWシリーズが乗る量産型を創造しよう。
後一番の問題は領主直属護衛機をどうするかだなぁ。
下手なもん創ってもあれだしなぁ。
やっぱ機動兵器とかもあれ系で揃えてる訳だし、直属護衛機もそっち系で揃えたいよなぁ。
となると、サイズダウンさせた奴にすっかねぇ。
……うむ、そうしよう。
つかまぁ、護衛機無くてもいいような気もしないでもないが油断は禁物だからな。
どうせ俺にゃ敵が多くなるのは目に見えてるし、備えあれば憂い無しってな。
よっしゃ、それじゃ早速創るか！！
「先は知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）で調べてと……ほう、母艦の構造ってこうなってんのか。うは～こりゃ複雑だな、創るの大変そうだ。」

やっぱり母艦クラスともなると、知識量が半端じゃねぇな。
それに使われている技術もすげぇ。
これだけでもハルケギニア統一出来そうだな。
まぁ、今のところやるつもりはねぇけどな。

「うっし、次は機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）で設計図をと……」

創る母艦と数はもう決めてあるからな。
それらに関する設計図を出してと……おっし、それじゃいくか！

「創造（クリエイト）！！」

ポクポク……

うひ～まだ終わらねぇのかよ！
まだ一機種目だぞ！
ちくしょうめ、舐めんなよ！

……

……チーン！！！

「だ～疲れたぞ、こんちくしょう！」

き、基地創るより大変てどんだけだよ！
で、でも、出来栄えは最高だな！
やっぱ『ハガネ』は外せねぇぜ！！

「苦労した甲斐があるってもんだな、こりゃよ！　さてと、どんどんいくとすっか！！」

創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……

「と、とりあえず母艦の創造は終わったか……やべ、少し休まねぇと体力持たねぇや……」

こ、こんだけ創れば例えハルケギニアの全軍で攻め込まれても余裕で勝てるだろう。
まぁ、過剰戦力な気がするが、下手に余裕ぶっこいてやられたらそれこそ目も当てられねぇからな。
ここはどんなに無茶でも、やっとかねぇとな。

「しっかしまぁ、こいつらに乗れる日が来るたぁなぁ……なんつーのか感慨深いもんだぜ」

とはいえ、これからが本番だからな！
やっぱ漢なら一度は憧れるもんだよな、スーパーロボット！！
最初に創るのは当然あれだな……おっしゃいくか！

「ほんじゃ、知識の本棚（ブックシェルフノウレッジ）で調べてと……ふむふむ、やっぱしっかり創れば内蔵武器も使用可能なのか。ならやっぱあれを持たせた上で完成させるべきだな。」

ゲーム本編じゃあれだったが、同時使用が可能になればかなり無敵だな。
やっぱ漢としては、あれを外す訳にはいかねぇからな。

「んじゃ次に機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）から設計図を出してと……」

やっぱりあれの設計図はかなり複雑だな。
よくこんな物思いついたもんだぜ。
ほんと、天才ってなわからねぇもんだな。

「うしゃ、準備も出来たしやるか、創造（クリエイト）！！！」

ポクポク……

や、やっぱり長げぇな……だが負けねぇぜ！
ど根性で創り上げてやらぁ！！！

……

……チーン！！！

「ぶはぁっ！　や、やったぜ、出来たぁぁぁぁ！！」

今回作ったのは勿論、『ダイゼンガー』だ！
やっぱよ、漢を目指す俺としてはこいつは外せねぇ！
なにせ、あの親分の機体だからな！
しっかし、この漢気あふれるフォルム……マジで惚れるぜ！
ああ、早くこいつに乗ってあの決め台詞言ってみてぇなぁ！！

「やっぱダイゼンガーはいいねぃ、痺れるぜ！」

こいつは基本スペックはゲーム本編と変わらないが、機体そのものに術式組み込んであるので魔法は通用しない。

更にはＡＩを内臓しているので、ある程度の自己判断能力もある。

有事の際には自動で敵を攻撃するように仕組んである。
加えて斬艦刀には、魔法をぶち破る為のフィールド発生器も加えてある！
内臓火気も合わせれば、最早無敵だぜ！！
「いや～やっぱ武神装攻はこうでなきゃな！」
いやいや、我ながら素晴らしい出来栄えだぜ。
この調子で残りの機動兵器も一気に創造しちまおう！
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
「ぶ、ぶは……流石にこれだけの数を作るとなると滅茶苦茶疲れるな……で、でも、これだけありゃもう敵はねぇぜ……」
りょ、量産型も含めて千体だもんな。
頑張った俺……これだけありゃ、もうハルケギニアで敵はねぇだろうよ。
しかし、こうして見ると壮観だよなぁ。
これが一斉に発進したらどうなるのかねぃ。
ま、とりあえず機動兵器の創造も終わったし、次はWシリーズだな。

何せこの基地運用するにはまだまだ足りないからなぁ。
頑張って創るとしますかね。

創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……
創造中……

「つ、疲れた……もう今日はマジで何もする気起きねぇ……」

Wシリーズをこれだけ量産するのは流石に堪えるな……
でもこれでこの基地も本格的に稼動する事が出来らぁな。
とりあえず、今日のところは休むとするか……フラフラだぜぃ……

……
……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼館▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「う〜い、ただいま……」
「お帰りなさいませ、随分とお疲れのご様子ですわね」
「ああ、ちぃと頑張りすぎてな。風呂沸いてっか？」
「はい」
「んじゃ入って来るわ、て、そういやヘレナは？」
「クラウスパパ！」

ガバッ！

「おわっと、なんだまだ起きてたのか？」
「うん……」
「んじゃ、パパと一緒に風呂入るか？」
「うん♪」
「おっし、そんじゃ行くか。悪ぃ、適当に着替え置いといてくれるか」
「畏まりました」

さてと、親子水入らずで風呂といきますかね。
ツェルプストーの別宅もなかなかでかい風呂だったが、俺の館のは風情ってもんがあるからな。
まぁ、ヘレナみたいな子供にわかるこっちゃねぇだろうけどよ。
と、そうだ、酒だ酒、やっぱ風呂には日本酒がねぇといけねぇやな♪

……
……

カポーン……

「うぃ～いい湯だぜ……どうだヘレナ、気持ちいいか？」
「うん♪」
「そうかい」

やっぱガキは笑ってるときが一番いいな。
でも、ヘレナも運がいいよな、あそこで俺が通りかかってよ。
あれがもしもクソ坊主共だったら、その場で殺されてただろうからな。

まぁ、ここにいる以上はもう安全だしな。
何かあれば俺が出りゃいいしよ。
最悪は保有戦力使って相手潰しゃいいしな。
力ずくってのは正直どうかと思うが、この世界じゃんな甘っちょろい事言ってたら逆に食われちまうからな。

「クラウスパパ、何飲んでるの？」
「あん？　酒だ酒」
「ヘレナも飲んでみたい！」
「ば～か、ガキにゃまだ早ぇっての、せめてキュルケ位になってからだな♪」
「ぶぅ～」

まぁ、ガキの頃ってな大人の真似したがるもんだからな。
つかよ、ふくれっ面したところで可愛いのは変わらんぞお嬢ちゃんよ♪

バシャバシャ

「おいおい、風呂で泳ぐもんじゃねぇぞ」
「楽しいんだもん♪」
「やれやれ、キュルケと一緒に入るときはやるんじゃねぇぞ」
「は～い」

全く俺も甘いよなぁ。
キュルケに聞かれたら怒られそうだな。
つっても、親父は結構こんなもんだろうさ。
叱るときに叱ればいいし、普段は甘くてもな。

「んじゃ、そろそろ頭洗うぞ、来な」

「うん」

ワシャワシャ……

「ほれ、じっとしてろって」
「クラウスパパ、痛ぃ～」
「我慢しろっつの、ほれ流すぞ」

ザバァ……

「きゃう！」
「はは、目に入ったか、ちゃんと目閉じてないと駄目だぜ」
「うぅ～」
「んな可愛い顔で唸っても怖くねぇぞ♪」

やれやれ家のお嬢はほんと面白いな。
反応が一々面白すぎるんだよ。
こりゃ俺も子煩悩間違いなしだな。

「んじゃ上がるぞ」
「うん」
「ほれ、体拭いてやっからじっとしてな」
「は～い」

しっかしまぁ、なんというかこの年で子持ちになるとはほんと思いもよらなかったな。
俺としてもガキは好きだからいいんだけどよ、これって学生結婚どころじゃねぇからなぁ。
現実世界じゃとんでもない事になってるよな。
俺も随分と変わったもんだぜ。

さてと、飯食って今日は寝るとするか。
明日からもまた忙しいだろうしなぁ。
早くのんびりしてぇぜ。

機動兵器完成！（後書き）

てなわけで、やっぱり登場の親分の愛機『ダイゼンガー』です。
すんません、作者的にあの機体凄くすきなんで……どうかご勘弁を。
それと入浴シーンですが、やっぱ結構難しいですね。
作者の頭の中では、泳ぎまわっているヘレナが想像されているのですが……
ちなみに、作者はロリペドではございませんのでw
なお、本日中に保有戦力に関する設定出します。
んでは！

※保有戦力設定（前書き）

漸く出せます保有戦力。ぶっちゃけかなり過剰戦力です。
でも自重しません！

5／1
領主専用機と護衛機について若干修正※保有戦力設定
※注意※
以下の各設定は今後の物語の進行に合わせ修正が入る可能性あり

※保有戦力設定

《《《《優先事項》》》》

・各ＡＩの最優先事項は領主の安全と生命の保全
・領主の安全と生命保全の障害は全て排除する
・第二優先事項としてテファ、マチルダ、ヘレナ、メイド三人の生命と安全の保全
・第三優先事項として領民と領地の保全

《《《《セキュリティ関係》》》》

・領主専用機は起動する為以下の情報が必要
↓『指紋／声紋／網膜パターン／ＤＮＡ／手動入力パスワード』
・起動した状態で別の誰かが乗り込んでも操作不能
↓操作時にも『指紋／声紋／網膜パターン／ＤＮＡ』を常に読み取る為
・その場合警告を発した上でＡＩが自動的に攻撃を開始

・量産機はＷシリーズと直接接続する事で起動
※Ｗシリーズ各機にはそれぞれ固有のＩＤあり
　体の各部を操縦席と接続する事でＩＤを読み取る
・起動した状態で別の誰かが乗り込んだ場合の動作は領主専用機と同様

・対ガンダールヴ用の防御策として使い魔のルーンの力を狂わせるフィールドを常時発している
　↓これによりルーンを通じて入る情報が狂わされ正確な情報を得る事が出来ない

・ガンダールヴが機体周辺に近づいた場合に限りＡＩは警告無しに攻撃を開始
　↓最悪の場合は諸共に自爆

《《《《保有戦力》》》》

・以下の機種は全て領主専用機
・ＡＩでの稼動も可能だが稼動効率は有人操作時の八割
・それぞれ一機ずつ作成される
・カテゴリーは『Ｓ』

・ダイゼンガー
・アウセンザイター
・Ｒシリーズ全機
　↓Ｒ－１以外は基本ＡＩ稼動
・アルトアイゼン・リーゼ
・ネオ・グランゾン
　↓平時は封印
・サイバスター

・以下の機種も全て領主専用機
・ＡＩでの稼動も可能だが稼動効率は有人操作時の八割
・それぞれ一機ずつ作成される
・カテゴリーは『Ｒ』

・Ｈｉ－νガンダム
　↓サイコミュ系操作はＡＩが代行
・ガンダムＦ９１

・以下の機種はＷシリーズの戦闘用兵を乗せ稼動

・所謂量産型
・カテゴリーは『ＷＲ』

・量産型ゲシュペンストＭｋ－ＩＩ改×三百機
・ゲシュペンストＭｋ－ＩＩ・タイプＳ×三百機
・量産型ヒュッケバインＭｋ－ＩＩ×二百機
・ドムトローペン×五十機
・グフカスタム×五十機
・スタークジェガン×百機

・以下は主人公＋Ｗシリーズにより運用される戦艦
・同時出撃の場合は、Ｗシリーズの中から艦長代理を選出
・カテゴリーは『ＢＳ』

・ハガネ－乗員四十体
・クロガネ－乗員四十体
・ヒリュウ改－乗員四十体
・ラーカイラム－乗員四十体
・アルバトロス×十機－乗員三十体
・グレートアーク×三機－乗員三十体

※乗員には整備士なども含まれる

・以下は歩兵、工兵などの兵力
カテゴリーは『Ｗ』

・Ｗシリーズ

戦闘用：千体
↓二十体で一部隊

リーダーは一部隊に一体
サブリーダーは一部隊に二体
↓平時は交代制で領内警備にあたる

戦艦操舵用：五百五十体
↓平時は予備役として待機
↓四十体は予備

医療用：百体
基地整備用：四百体
機体整備用：百体

街警備用：二百体
↓街の警察として稼動
↓武装は非殺傷武装を基本とする
↓暴動鎮圧や賊討伐の場合には殺傷武器を使用

Wシリーズ用メンテナンス要員：五十体

・以下の二機種は人間サイズにサイズダウンした機体
・カテゴリーは『G』

・護衛用人間サイズ：ゲシュペンストMk－II×二十体
・護衛用犬型サイズ：バクゥ×二十体
・領地防衛用人間サイズ：バレリオンV×百体
：ガーリオ×八十体

・領主専用護衛機：クロスボーンガンダムX1フルクロス、ヴァルシオーネ

・軍事用偵察衛星×三機
↓映像の撮影範囲はハルケギニア全体
↓受信は専用の小型通信機

※今後も増える予定あり

・全て海底の地下に作られている
・領主の部屋からテレポーターのみで入る事が出来る
・許可無き侵入者は即時排除
・カテゴリーは『B』

・エネルギープラント
・水の浄化システム
・空気清浄機器
・バイオハザードシステム
・対地、対空用迎撃システム
・各種生産工場
・整備用格納庫
・発進用ドッグ
・訓練用施設
・医療施設
・居住施設
・Wシリーズ用整備施設

《《《《カテゴリ》》》》

・各機器の区分けの為の総称
・各カテゴリの意味は以下の通り。

・カテゴリS：スーパーロボット

・カテゴリR：リアルロボット
・カテゴリWR：量産型リアルロボット
・カテゴリBS：バトルシップ
・カテゴリW：Wシリーズ
・カテゴリG：ガーディアン
・カテゴリB：ベース（基地）

※保有戦力設定（後書き）

ここまで来るとチートうんぬんの前に、お前は何をしたいんだって感じですね。
まぁ、世界相手にするならこれくらいは必要かな～と。
とはいえ、相手はハルケギニア人ですからねぇ、ぶっちゃけ戦艦一隻で事足りるとは思うのですがそれだと詰まらないですからね！

増える家族（前書き）

漸く書きあがりました、随分時間掛かりまして申し訳ありません。
今回漸くマチルダとティファニアを出せました。
んではどうぞ。

増える家族

機動兵器の作製も終わり、基地内部用の人員としてWシリーズを大量増産。
結果、基地の稼働率は百%に達している。

これにより、現在生産工場をフル稼働させ食料や水、貴金属などこれ以降必要と思われる物を作っている最中だ。
材料自体も海中のプランクトンや、海底に眠る豊富な鉱物資源などを使っているため、ほぼ無尽蔵に作成可能。
緊急で必要な訳ではないが、何れ何らかの形で必要になる可能性が高いので今のうちから備蓄しておく事にする。

次に例の風石に関してはクロガネを使い回収を開始している。
量が量な為、一朝一夕とはいかないのが歯がゆいところではあるが、着実に風石の回収は出来ている。
ある程度の量を減らせば大隆起は起きないからな、焦らず確実にこなしていかねぇと。

まぁ、風石の回収が済めばロマリアの聖戦への大義名分は無くなる。
なんせあのクソ坊主共は、下手をすれば世界自体を滅ぼしかねないからな。
何があっても聖戦なんぞさせる訳にはいかねぇ。

それと、ヘレナの耳については当初の予定通りに人間の耳と同じ形に整形した。
まぁ整形といっても、メスを入れる整形ではなく基地にある医療設備を使い、寝ている間に耳の形を整えた。

いや～思いのほかナノマシン医療ってのは便利だわなぁ。
これは今後色々使えそうだから、暇を見つけて研究しておくべきだな。

耳を整形後、ヘレナは今では村のガキ共とよく遊んでいる。
いや～ガキが笑ってる顔っつーのは、やっぱいいもんだぜ。
心が和まぁな。

それと、目下の最大の目的であるティファニアとマチルダの事についてだが、マチルダに手紙を出しウェストウッド村へ誘い出している。
手紙の内容としては、ティファニアの秘密を知っていると……まぁ腹黒いやり方ではあるが、確実に誘い出すならこの方法が一番だろう。
後は二人に事情を話し、全員纏めて俺の領地に連れてくりゃいいだけだ。
幸いにして、二人に加えて孤児のガキ共養うくらいなら余裕だしな。

こんな訳で今のところほぼ順調なのだが一つだけ懸念している事がある。
それが何かと言うと、サイバスターだ。

「しっかし、サイバスター創ったのはいいが、精霊はどうすっかねぃ」

そうだ、サイバスターを創ったのはいいが、精霊が宿っていないので本来の性能が発揮出来ねぇんだ。
他の機体に関しては、訓練場で試したが問題なく性能を発揮出来たんだがなぁ。

まぁ、ネオ・グランゾンだけは動かしていないがな。
あれは本当の意味での最終兵器だ……下手に動かしたらそれこそ洒落にならん。
ま、キュルケやヘレナに手出されたら躊躇するつもりはねぇけどな。

「う～む、とはいえ精霊を作る事は出来んしなぁ……」

俺の能力では生きている者は作れないからなぁ。
精霊も一応生きているって事になるし、俺の能力では創り出せないんだよなぁ。
なんとかしないと、せっかく創ったサイバスターが無駄になっちまう。
どうしたもんかねぃ……

ヒュゥ……

「ん？　風？　こんな場所でなんで風が……」

そうして考えていると、各地より採集した風石が輝き出した。
その途端、辺りを暴風が包み込んだ！
不味い、かなりヤバイ状態だ！

「クッ……全員衝撃に備えろ！」

ゴウッ！

くそったれ、何がどうなってやがんだ！
今までこんな事無かったはずだぞ！

ピタッ！

て、突然風が収まったな……一体全体どうなってやがんだ。
大体窓も無いこの地下基地で風が吹く自体妙だってのに。
そんなとき、俺の後ろに現れた者それは……

「……お前誰だ」
『風の精霊』
「……あんだと」

なんで風の精霊が現れるんだよ……あれか、大量に集めた風石が原因か？
だとしたら、他の場所でも現れてもいいだろうに。
なんでここに現れるんだよ……どう考えてもおかしいだろ！

『ここは風の精霊力が満ちている、それに……』
「……サイバスター？」

おいおい、サイバスターと風の精霊が反応してるじゃねぇか！
つかお前はハルケギニアの風の精霊だろ、ラ・ギラスにいた風の精霊とは別物じゃねぇのかよ。
なんでサイバスターが反応してやがんだ！

「……なんでサイバスターが」
『お前がこの存在を創ったのか』
「そ、そうだけどよ……つかお前、ハルケギニアの風の精霊だろう、それがなんで……」
『これが私を呼んだ』
「サイバスターが？」
『そうだ』

サイバスターが風の精霊を呼んだって……それじゃ何か、こいつには意思があるとでも言うのか？
んなバカな……確かにゲーム内でも意思があるような行動を起こした事はあるが、それは既に精霊との契約を果たしているからであって、素の状態のサイバスターに意思なんてある訳がねぇ。
しかしなぁ、精霊が嘘を言うとも思えんし……

「サイバスター、お前本当にこいつを呼んだのか……」

フォォォォ……

俺がそう問いかけると、まるで返事をするかのごとくサイバスターが発光し始めた。
どうにもこいつには意思があるようだな……
つか、これじゃゲームよりもハイスペックになるんじゃねぇのか？
それともあれか、ゲームでのサイバスターしか俺は知らないが、本来は意思持っていたっていうのか？
んなアホな……

「しかし、サイバスターがお前を呼んだとして、どうなるんだ？」
『契約を欲している』
「契約……だと？」
『そうだ』

つまりはあれか、本来契約すべき風の精霊と同じ属性の精霊を呼び込んだって事なのか？
そうなると、サイバスターがこいつと契約を果たせば完全な状態になるって事か。
なんだか滅茶苦茶な気もするが……

「契約を欲してるとはいえ、お前自身はどうなんだよ？」
『我に依存は無い』
「依存は無いとしても、契約したとしてお前に何かメリットはあるのか？」
『そのような感情は我にはない。ただ、我は自由に空を舞うだけだ。』

なるほど、つまりはサイバスターをこいつ自身の器にしようって事か。
確かにサイバスターは風の魔装機神だしなぁ……空を飛ぶにはうってつけだわな。
まぁ、サイバスター自身が契約したいってなら俺には反対する理由はねぇけどよ。

『この存在の主はお前なのだろう？』
「まぁ、そうなるな、俺の専用機だしよ」
『ならば我もまたお前に従う』

風の精霊が配下に着くか……こりゃ案外願っても無いチャンスかもしれねぇな。
精霊の加護は、相当なもののようだからな。
領地にとってもいい事だろうし、何よりも地下の風石の件でも解決の手段になるかもしれねぇ。
こりゃ一石二鳥ってやつかもしれねぇな。

「わかった、サイバスター自身が望んでいるなら俺にも異論はねぇ」
『そうか、なればお前とも契約しよう』
「俺と？」
『そうだ、腕を出せ』

「ああ……」

腕を出すと、丁度手首の辺りに風が巻き……腕輪が現れた。
装飾も無く、少しばかり緑がかった腕輪だ。

「これは？」
『我との契約の証』
「これがねぇ……」
『それがある限り、我はお前に従おう』
「そうかい、わかった」

そうして俺との契約後、風の精霊はサイバスターと契約を果たした。
まぁ、見た目は変わっていないのだが、サイバスターから感じる気配というかなんというか……そういった物が今までと異なっているのがわかる。
こりゃ、相当な力を秘めているようだ。
あれか、常時ポゼッション状態とかいうんじゃねぇだろうな……
そんなんじゃ幾ら俺でも倒れちまうぞ。
まぁいいか、サイバスターが強力になりゃそれだけ今後色々便利にならぁな。

「しかし、どうしたもんかねぇ」
『何を考えている』
「お前の呼び方だよ」
『我の呼び方？』
「ああ、何時までも風の精霊じゃ格好付かねぇだろ。どうだ、『サイフィス』って名前はよ。」
『サイフィス……』
「そうだ、本来サイバスターと契約を果たすはずの精霊の名だ」

『気に入った』
「そうかい、そいつは何よりだ」
サイフィスも名前については了承してくれたようだな。
本来の名前そのままだが、まぁ本人も気に入ってるしいいだろう。
風の精霊って呼び方も、なんかしっくり来ないしな。

……
……

サイフィスと二～三話し合い、領地に居る間は常に領地内部の監視を頼んだ。
もしも不当な輩が侵入した際は、遠慮なく追い出してくれるよう頼んだ。
サイフィス自身もその事については了承してくれた。
序に風の精霊としての加護として、領地内部の空気の浄化と風を利用しての気候の安定化をしてくれるそうだ。
どっちかと言えばそっちのが有難いわな。
今後を考えれば、精霊の加護は非常に有難いからな。

それとサイバスターとサイフィスの契約の内容だが、どうやらサイフィスの一部がサイバスターに乗り移る感じらしい。
というのも、精霊自体が複数の精霊の集合体みたいなもので、分裂したとしても意識自体は同じ物らしい。
つまりは群体みたいな存在ってところだろう。
なので本体のサイフィスと、サイバスターに乗り移るサイフィスは同じ存在って事になる。
という訳で、本体の方には自由にして貰う事にした。
縛り付けてもあれだしな。

……

……

なんともまぁ、ご都合主義って感じがしてならないが、とりあえずサイバスターの件も片付いたしそろそろ本来の目的であるティファニアとマチルダを迎えに行くとしますかね。

一応監視衛星で確認したところ、マチルダはウェストウッド村に向かったみたいだしな。

まぁ、最初は不審がられるだろうが、なんとか領地に連れて行けるように話を上手く持っていかないといけねぇな。

「ウェストウッド村の様子はどうだ？」

「例の人間が到着した模様。それ以外は変化無し。」

「わかった」

どうやら予定通りにマチルダは到着したようだな。

それじゃ急いで行きますかね。

序だから、サイバスターの初飛行といきますか。

「サイフィス、出掛けるぞ」

『どこへ行く？』

「アルビオンさ、ちとヤボ用でな」

『わかった』

「ああ、そうだ、そのままだとあれだからサイバードに変形してくれっか？」

『わかった』

ガシャ！

変形は一瞬か……もうちっとこう余韻を持たせるとかねぇのかよ。

浪漫てもんがわかってねぇなぁ……
まぁ、いいか、とりあえず向こうへ行くとなると移送用のコンテナが必要だ。
ティファニアとマチルダだけならなんとか乗せられるが、ガキ共も一緒だとすると流石に無理だからな。
ま、コンテナの方は創ってある事だしサイバスターに取り付けますかね。

「おい、W1リーダー」
「イエス、クリエイター」
「サイバードに移送用コンテナを取り付けろ」
「了解」

作業中……

しかし、サイバードの足で掴むような感じなんだが、あれ大丈夫なんか？
自分で創っておいてなんだが、えらい揺れそうな気がするが……

「取り付け作業完了」
「OKだ、んじゃサイフィス、乗り込むからハッチ開けてくれや」
『わかった』

コックピットブロックと思しき部分のハッチが開いたが、あんな風になってる訳か。
あんま詳しく見た事ねぇからなぁ、よくわからなかったがちゃんと出来てたみてぇだな。
んじゃWシリーズに言って、本基地からの機動兵器初出動といきますか！

「そんじゃちょいとアルビオンまで行って来る。発進口開け！」
「了解、発進口開きます」

ゴゴゴゴゴ……

「進路クリア、サイバスター発進位置へ移動」

ゴゴゴゴゴ……

「発進準備完了、オールクリア」
「うっし、そんじゃ、サイバスター発進するぜ！」

キィィィィ……ゴゥ！

うっひ～は、はえぇぇぇぇぇ！
なんだよこれ、もう上空二千メートルって……どんだけのスピードだよ！
流石は風の魔装機神だ、ここまで早ぇとはよ。
おでれーたぜ！
さってと、このままアルビオンまで直行して二人を説得し領地に連れて帰ろう。

……

……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼ウェストウッド村▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「テファ！」
「あ、マチルダ姉さん、おかえりなさい」
「……な、何も無かったの？」

「え？」
「あ、いや、何も無いならいいんだ……」
どういう事……あの手紙からすればテファの事を知っていたはず。
ならなぜ、テファになんの手出しもしてないのよ。
どういう事なの……
「マチルダねぇちゃん、なんか来るよ！」
「え？」
そう子供に言われ、慌てて外に出てみると……大きな鳥？
にしてはどうもおかしい、翼が見当たらない。
それに足に何か箱を抱えてる……なんだっていうのよ！
「危険だから皆は下がっていなさい！」
「で、でも、マチルダ姉さん……」
「いいから、早く！」
そうこうしている内に、大きな鳥は私達の目の前に降りて来た。
何が何だかわからないけど、テファ達に手出しはさせない！
ドスンッ……
やれやれ、やっと着いたな。
んで、目の前にいるのがマチルダとティファニア、それとウェストウッド村の孤児のガキ共か。
よくもまぁこれだけの人数をこんな寂れた場所で養ってたもんだ。
マチルダの根性には感心するぜ。
さてと、そんじゃ大勝負といきますかね。

ガシャ……

突然、目の前の大きな鳥の体の一部が開いた。
一体何がどうなってるのさ！
訳が分からないわよ！

「よっと……ここがウェストウッド村か……随分寂れてやがんな」
「……」
「よう、お前さんらがマチルダとティファニアだな」
「……私の本名を……あんた一体何者？　事と次第によっては……」
「ああ、やめときな、俺は喧嘩は強ぇからよ。つか別に喧嘩しに来た訳じゃねぇよ。」

警戒すんのも無理ねぇわな。
あの手紙に加え、突然サイバスターで現れりゃ当然だわな。
とはいえ、ここでこうしてても埒明かねぇからな、さっさと話始めるとしますかね。

「まぁ、詳しくは中で話そうや。ちょいと邪魔するぜぃ。」
「ちょ、あんた、勝手に！」
「ティファニアもよ、悪ぃが話しに加わってくれねぇか。お前さんにも関わる事なんでな。」
「う、うん……」

……
……

いやしっかし、生で見るとすげぇなティファニアの胸。
あれだけ別の生き物みたいだぜ。

それにマチルダも、なんというか姉御って感じだわな。
やばいな、惚れ直しちまったぜ。

「さてと、落ち着いたところで話始めようか」
「あんた一体何者なのよ、私やテファの事を知ってるなんて……」
「ああ、そういや自己紹介がまだだったな。俺の名は『クラウス・フォン・アキテーヌ』、ゲルマニアの北の方の領地を有する伯爵やってるもんだ。よろしくな。」
「ゲルマニアの？」
「ああ、そうだ」

どうしてゲルマニアの貴族がここの事を知ってるのよ。
大体、私やテファの本名も知ってるなんておかしいじゃないの。
一体何がどうなってるのよ。

「あ、あの……」
「ん？」
「貴方は私の事……」
「ああ、ハーフエルフだろ？　知ってるよ」
「こ、怖くないの？」
「お前が？　ははは！　怖い訳ねぇじゃねぇか、むしろお前は可愛いぜ」
「え……」

どう見てもティファニアは怖がる対象じゃねぇよなぁ。
つか、どこどうやって怖がれってのよ。
これなら、現実世界のオカンの方が怖いっての。

「で、どうして私達の事を知ってるのよ」
「俺はこのハルケギニアにおいて知らねぇ事はほとんどねぇんだわ」
「どういう事よ……」
「お前ら二人の生まれも知ってるって事さ」
「！」

そりゃ驚くわな。
モード大公関係の情報は、アルビオン王家の醜聞にも関わるからかなりキツイ緘口令がしかれたはずだ。
それを知ってるとなると、普通ではあり得んものなぁ。
まぁ、俺は原作知識で知ってるだけだがな。

「まぁ、俺としてはティファニアがモード大公の娘だって事はどうでもいいんだわ」
「え？」

「はっきり言えばよ、俺がお前ら二人を引き取りたいのはな、あれだ、俺がお前ら二人に……」

「私達二人に？」
「一目惚れしてっからだよ！」
「「……へ？」」

いやさ、だってそれが全ての理由だもんな。
でなきゃ、態々こんな所まで来る訳ねぇしな。

「あ、あんた本気で言ってるの？」
「おう、勿論マジだ。つか、こんな事冗談で言う訳ねぇだろうよ。」
「そ、そんな……私なんて……（真っ赤」

「で、でも、テファは！　それに私だって、アルビオン王家に滅ぼされた家の人間よ！」

「だからどうしたってんだよ。惚れた女守るのは漢の役目だろうが、お前ら二人俺がきっちり守ってやるよ。何、心配するこたぁねぇやな、どこぞの阿呆が難癖付けて来る様ならいくらでも相手になってやろうじゃねぇか。」

「……」

まぁ、ティファニアやマチルダの事が公になれば、アルビオン王家やらロマリアのクソ坊主共が難癖付けて来るだろうな。

けどよ、親がどうだったかは知らねぇがこの二人は別に何も悪いこたぁしてねぇんだよ。

それなのにこんな場所で苦労してるなんてよ……これを放置してたら人道に外れるってもんよ。

相手が誰だろうと、俺はこいつらを守ってみせるぜ、勿論ガキ共もな！

「なぁ、マチルダ、ティファニアよ。お前らは世間に対して何も悪いこたぁしてねぇんだ。そのお前らが世間から隠れて生きる必要なんざねぇやな。もういいじゃねぇか、今まで散々苦労して来たんだし、ここらで楽になってもよ、誰も文句は言わねぇし俺が言わせねぇ。だからよ、お前らの身の振り方、俺に任せちゃくれねぇか？」

「け、けど……」

「それにだな、後一年と少しの間にアルビオンで内乱が起きる」

「な、内乱？！」

「ああ、詳しく話すとな……」

アルビオン内乱の発生時期や規模について二人に詳しく説明。
二人共顔真っ青にしてやがるな。
まぁ無理もねぇか、遠因とはいえ自分の家が関わっているとなりゃ気が気じゃねぇわな。

「そういう理由もあってな、俺はお前らを放って置く事は出来ねぇんだよ」
「で、でも、私が行けば貴方に迷惑が……」
「何も迷惑になる事なんてねぇよ、心配すんな」
「……」

「今すぐ決めるのは難しいだろうから、一週間後にまた来るからそんときに答え聞かせてくれや、じゃあな」

「……あ、あの！」
「ん？」
「ありがとう、私の事、心配してくれて……」
「何、惚れた女の為なら骨身を削るのは当然の事だ、気にすんな、じゃあな」

本来なら、今日連れて帰りたかったけど、行き成りすぎたわな。
俺も少しは自重しねぇとな。
まぁ、一週間後にどういう答えが出るかだが、一緒に来ないとしても出来る限りの援助はしよう。
あの二人に幸せになって欲しいって気持ちだけは、本当だからな……

……
……

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼一週間後▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

あれから一週間が経過し、今現在ウェストウッド村へ向かっている。

この一週間の間は特にこれといった事は無く、平穏無事に過ごしていた。

まぁ、ヘレナが夜中にキュルケに会いたいって泣き出してしまい、しょうがないからサイバスターでツェルプストー領へ行ったがな。

その際キュルケもゲイズさんもエリーゼさんもどえらい驚いていたがな。

序に三人にマチルダとティファニアの事を説明しておいた。

驚いてはいたが、既にヘレナという実例があるのでもう半分以上諦められた感じだったな。

無事に引き取る事になったら、三人に会わせる事に決まった。

それと、念の為サイフィスの事についても話しておいた。

精霊を味方に付けたと聞いたとき、ゲイズさんは顎が外れそうなくらいに驚いていたな。

なんせ、精霊味方に付ける人間なんてそういるものじゃないからな。

一応その事は他に漏れないように口止めもしておいたが、まぁ、漏れたところで信じられるような内容じゃないから問題ないと思うけど。

でも、何れは他の精霊も呼び込んで、残りの魔装機神も作りてぇとは思ってるんだけどな。

グランヴェールはキュルケ専用、ザムジードはマチルダ、ガッデスはティファニアだな。

やっべ、なんかわくわくしてくるな。

『着いたぞ』
「お、そうか、んじゃ着陸してくれや」
『わかった』

さて、色よい返事が貰えると嬉しいんだがね。
どうなるかな。

「よう、約束通り来たぜ」
「あ、クラウスさん」
「来たのね」

なんだか疲れた顔してんな。
やっぱ悩んだのかねぇ。
悪ぃ事したかな。

「んで、どうよ、答え出たかい？」

「ええ、よくテファとも話し合ったわ、結論から言えば私とテファ、それと子供達は貴方の所へ行くわ」

「そっか、そいつぁ嬉しい限りだね」

やれやれ、この一週間気になってなかなか寝付けない事が多かったが、これで漸くすっきりするわな。
ガキ共については領地の村の方で引き取り手というか、孤児院みたいなの作ったからな。
あそこのじっちゃんとばっちゃんなら、きっちり面倒見てくれるだろうしな。

まぁ、他の村人も協力してくれると言ってる事だし問題あるめぇ。

「でも、子供達はどうするの？」

「ああ、それなんだがよ、俺の領地にな孤児院みたいなの建ててあんのよ。んで、そこを任せてるじっちゃんとばっちゃんがよ、是非世話したいってよ。まぁ、他の村人も出来る限り協力してくれるって言ってたし、金銭的な面では俺がきっちり面倒みるからよ、何も問題はねぇよ。」

「そうですか」

「でも、いいの？　本当に私達を連れて行って……」

「心配すんな、俺の娘もハーフエルフだからよ」

「「へ？」」

あ、やべ、そういやヘレナの事言ってなかったな。

しまった、失敗失敗、ははは。

「そういや言ってなかったっけか、そりゃ悪ぃな」

「ほ、本当なの、それ？」

「おう」

「……な、なんだか必死に悩んで損した気分だわ」

「ははは、悪ぃな。まぁ、そういう訳だからよ別にハーフエルフだからどうこうってのは俺には関係ねぇ訳よ。」

ツェルプストー一家も初めはあれだったが、今じゃヘレナにゃ骨抜きにされてっからなぁ。

特にゲイズさんとエリーゼさんの可愛がりようったらもう、滅茶苦茶甘々だからな。

見てるこっちが恥ずかしくなってくるくらいだからなぁ。
まぁ、それ言ったら俺もだけど。

「それとな、俺の妻がよ、是非連れて来いってよ」
「ちょっとあんた、三人も嫁にする気？！」
「おう！　三人纏めてきっちり幸せにしてやる！　俺も漢だからな、二言はねぇぜ！」
「はぁ……あんた、本当に滅茶苦茶ね」
「そうか？」

「そうよ、あんたみたいな貴族見た事も聞いた事もないわよ……でも、私は嫌いじゃないわ♪」
「わ、私も……貴方の事は……その、嫌いじゃ……」

「ははは、そいつは嬉しい限りだねぃ。お前ら二人とガキ共、俺がきっちり面倒みてやるぜ！」

いや～よかったよかった、これで無事に二人を保護出来たな。
この時点でティファニアを確保してるとなると、本来の歴史通りに行けば才人が死ぬ事になるが……ま、どうでもいいか。
別に奴を助ける必要性は無いし、どの道原作通りに事を進ませるつもりはないからな。
とりあえず、暫くは領地の方に掛かりっきりになるかね。
懸念があるとすればキュルケの魔法学院行きがどうなるかだな。
なんか嫌な予感すんだよなぁ……変な事にならなきゃいいんだが。
ま、悩んでも仕方ねぇか。

「んじゃよ、早速引越しすっからよ、荷物纏めてくれや」
「い、今から？」
「おう、膳は急げってな。おうガキ共、これから俺の領地に引越し

だ、荷物纏めな！」
「お引越し？」

「おうよ、いい場所だぜ、村人もいい連中ばっかだしよ。ガキ共も多いからな、友達も増えるだろうよ。」

「本当、兄ちゃん！」
「おうよ！」
「やったぁ！」

ははは、やっぱガキ共の笑顔ってないいもんだな。
こいつらもきっちり守ってやらねぇとな。
いやはや、こりゃ忙しくなりそうだな。
ま、こいつらの為にも、俺も一層頑張らねぇとな！
うっし、気合だぜぃ！！

増える家族（後書き）

二人の勧誘部分は、何度も書き直しました。まぁ、まだ上手く纏められていない気がしますが……

まぁ、すぐさま結婚とはならないでしょうが、何れは……

次回はキュルケも交えた話になる予定です。

まぁ、また悩むかもしれませんが……どうか一つよろしゅうお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3239t/

ゼロの使い魔　-ゲルマニアの終わらぬ円舞曲-

2011年5月16日19時40分発行